
トリップしたら幼児化&翼が生えた！

ティシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリップしたら幼児化&翼が生えた！

【Nコード】

N8431P

【作者名】

ティシー

【あらすじ】

中二病から抜け出せない女子高生がある日突然異世界へ。
トリップのオプションは白い翼と幼児化！

超美形の双子の王子と、同じ血が通っているとは思えぬ野獣顔の弟王子を巻き込み、巻き込まれて、それでも好き放題生きていく。

人気投票を設置しましたので是非是非ご協力ください！ ゴールを決めずに好き勝手やっていくので人気によって物語も変わってい

くと思わねます。

トリップ来たコレ！

ありり？

……ここは何処いずこ？

私は……ニコニコ動画にハマって中二病にかかったまま未だ抜け出せない華の女子高生。

ok。それは知ってる。

で、最大の疑問。

視界に入る真っ白な羽っぽいパタパタは、

なに？ 結構デカイ。自分の体を覆い隠せるくらい。

首を右へギギギと動かしてみる。

……くそっ、もう少し柔軟体操しとくんだった。体の硬い私だから根元は見れなかったけど、なんか私の背に繋がってるような……？ん？地面がいつもより近い？

とりあえず左にもグググと動かしてみる。

あ痛ッ！

寝違えてたんだった！

「おおぅ……」

首を押さえて一人悶えていると、足元に影が出来た。

「何者だ」

あ、中々イイ声。グイっと見上げると……顔は厳しかった。ついでに持つてる物も厳しかった。

抜いていないものの、大男の右手は腰の物騒なものに添えられていた。

「ちよちよちよ落ち着こう？ か弱い乙女にいきなりそれはないよ！？ 大体人に名前聞く時はまず自分からって教わらなかったかコソニヤロー！」

最後の方は何故か涙目になって喧嘩腰だ。名前聞かれてもないけど！

だって、だってっ！さっき思い出したけど、本当は今から

「お気に入りのニコ生見る予定だったんだー！！！」

あ、めっっちゃ引かれてる。多分ニコ生の意味は理解出来てないだろうけど突然叫びだした女に引いた事は分かる。

しかしその人は強かった。強靱な精神を持っているようだった。

「……俺はジュノア。おまえは？」

「はい！ よく聞いてくれました！ 音乃ねのちゃんでっす しくよる！」

あ、やばい。なんか名前聞いてくれたことが嬉しくて調子乗った

らドン引きされたっばい。

てか名前がカタカナ！目が藍色！やっぱりここは 異世界？
夢にまで見た 異世界？

「ヒヤッホウ！」

しまった嬉し過ぎて心が出てきちゃったよ。テヘ

あ、ジュノちゃん（命名）の顔が引き攣ってる。そんなに引かないで？ちよつと変わってるだけだヨ？自覚は一応あるヨ？

そこでふと周りをグルリと見渡す。

「なんだか高級感溢れてる庭ですね」

まともな言葉が出たことに安心したのが、ジュノちゃんの顔は無表情に戻った。

「……どこから来た？」

おっと私の言葉はスルーかい？いいよ別に。そんなことじゃ拗ねないもんっ。

「えー教えて欲しいって言うんならー？ 教えてあげてもいいk
すいません調子乗りました日本からトリップしたっばいです」

右手で髪をクルクルさせながらギャルっぽく言ってみただけど絶対零度の視線に気付いたので戻した。

なんだか翼もシヨゲた気がした。射殺されるかと思ったお。

「ニホン？」

「イエス！ ジャパニーズ！ 知りません？」
「…聞いたことがないな」

来たコレ！トリップ万歳！

「やったー！ じゃジュノちゃんお世話になったね！」

私この世界で自由に生きてくから！！

「ジュノちゃんはやめる。そして待て。家は分かっているのか？」

「ん？ これから見つける！」

「おまえのようなガキが一人でか？」

「ガキ！？ いや確かにまだ18歳だけどガキって言われるほどガキじゃないよ！」

「……18？」

「そーだよ！」

えっへんっ、といった感じに腰に手をつけて仁王立ちしてみた。
翼がバサアって広がった気がしたけど気にしない。

「……そうだな。だが今日はもう日が暮れる。家へ来い」

ええええ！ナンパ！？ 異世界来て早速ナンパ！！んもうっ、音乃ちゃんつたら罪なオ・ン・ナ！

……じゃなく。ジュノちゃんからはそんな雰囲気は全く出ていなくて、聞き分けの悪い子ども相手に困ってるような感じだった。

え、それ私？もしかしなくてもその相手私？……うん、お腹すいた。

「お邪魔しますっー！」

腹が減っては軍は出来ぬってことでお世話になることだ。

そこで 衝撃を受けた。

「な、なんじゃこりゃああー!!!」

家が豪邸だったからじゃない。
メイドが何人もいたからじゃない。
ジュノちゃんがなんか偉い人だって知ったからじゃない。

「誰コレ!!!? いや私だけど!」

そう。鏡に映った自分を見て絶句。
どー見ても写真で見た数年前の自分と被る。翼が生えてるっついで違いはあるけど。そういえば声もちよっと高い。

「よ、幼児化?」

これもトリップの洗礼か!?

「どうした! 何かあったのか!」

ジユノちゃんの声がして、扉が開く。

「ジユノア様、女性の部屋を突然開けては……」

着替えさせてくれていたメイドが震える声で言う。
だがそんなことを気にしている余裕はない。

「ジュジュジュジュジュノちゃん！」

「落ち着け。どうした？」

「わた、わたし小さくなってる！」

「は？」

「翼も自分のだし！」

厳つい顔をしかめ、わけが分からないという顔をするジユノちゃんとメイドさん達。

「だからっ！」

言いかけてやめる。待てよ？このまま幼い設定でここに居座るってどうだろうっか？

「ナイスアイディア！」

「……何がだ？」

はっ。しまった、またも口から！

「ジユノちゃん……私行く所ないの。ここにいちゃ……ダメ？」

こてん、と首を傾けて（勿論右へ）胸の前で手を合わせてお願い

する。

言っておくが普段の私ならしない。子どもという利点を活かしてみただよ？

「……その呼び方をやめたらいい」

「やったあ！ 流石ジユノちゃん！」

「……」

喜んだ拍子に羽がバサバサと動く。

「ねえジユノちゃん。なんで私羽あるの？」

「知らん」

「んま、いつか！」

今度飛べるか試してみよう。

と、いうわけで！

「ジユノちゃん、皆さん今日からお世話になります！！」

パパ、ママ私やったよ！念願の異世界へ来れたよ！！

家族揃って中二病、もちろん私も中二病から抜け出せない！そんな音乃が小さくなって異世界で生きるよ！！

平和に（予定）異世界を満喫してみせるよ！

トリップ来たコレ！（後書き）

なんか始めちゃいました新連載！

思いつくと留めておけない性質なんです！

「龍守」を放っておいてるわけでは……な、ないよっ？

ニコ生〓ニコニコ生放送

親しくなくても遠慮なし

「ふんふんふんふんふんふんふんっ」

ムリだ！

「ジュノちゃん飛べない！」

「そのようだな」

翌日早朝に、ジュノちゃんとその他大勢のメイド達と外へ出て翼を動かしてみるが、全く飛べない。

「では俺はもう行く。いい子にしている」

「はい！」

ジュノちゃんの朝は早いらしい。使用人達に混じって整列すると、馬で駆けていくジュノちゃんを見送った。どこに行ったのか知らないけど。

「さあネノ様。あちらで遊びましょう」

「うえ？」

遊ぶ？驚いて変な声出ちゃったよ。何故様付けされてるか分から

ないしメイドまで付いちやっただけど、私付きメイドになった17歳のリニーはこの屋敷の中で最年少らしい。

「明日には色々なおもちゃが届く予定ですが、今日はあるもので我慢してください」

そうかそうか。私小さい子なのか。何歳くらいに見えてるんだろうか？

私が鏡で見た感じでは10歳くらいだったけど……。

しかし！見た目それぐらいでも実際18歳なわけで、おままごとなんて歳じゃない。それに今日は探索したいんだあ！

「やだよりニー！音乃は探検するの！」

しゃべり方もわざと子どもっぽくして我侭放題で行こうと思う。適応力はバツチリだ。すでに気分はお姫様。

言うておこう、私の辞書に『遠慮』という文字は無い。使えるものは最大限に活用する。

「ですがネノ様……」

これはいけそう。もう一押し。

「リニー……お願い」

ウルウルと瞳に涙を溜まらせ（出来てるか分からないけど気分だけ）泣きそうな声で（気分だけ）懇願する。

「わ、分かりました！ それではネノ様のお好きな場所へ参りましょう」

よっしゃあ！……おっと危ない。思わず拳を突き上げる所だった。翼はバツサアってなっちゃってるけどね。

「ありがとウリニー！ 大好き！」

ちゃんとお礼は言わないとね！アメとムチ（？）が大事だよね！
さてやっぱり屋敷の情報を知っておくべきかな。

「ジユノちゃんのお部屋行く！」

「ジユノア様の、ですか……？それはちょっと……」

なんだなんだ！？妖しいものでもあるのか？！違うか。そりゃ主の部屋は勝手に見せられないか。しょーがない、ジユノちゃんが帰って来たら見せてもらおう。

「じゃあお家歩くー」

「はいそうしましょう。ネノ様、手を繋いでもよろしいでしょうか？」

「うん、いいよー！」

歩きながら情報収集も忘れない。あ、手汗大丈夫かな？

「ジユノちゃんどんな偉い人なの？」

「ジユノア様は藍騎士団団長でいらっしやいます」

「あい……？」

「はい。瞳の色から名付けられたものです。ラニッシュ国の住民は目が藍色をしているので」

ほうほう。屋敷の雰囲気から偉い人っぽいことは分かってたけど、

まさかの団長。

でもってこの国はラニッシュというらしい。

「藍騎士団の他に黒騎士団と白騎士団がありますが、藍騎士団への入団は最も難しく、更に団長となりますと国の英雄でございます！」

「……う、うむ。語っていくうちにドンドン熱くなっていくリニーだけど、私が子どもということのを忘れてないだろうか？」

「ジユノア様が団長になられて7年。この国が敗戦したことなんて一度もありませんわ」

まじですか。ジユノちゃんすごいね。

「ジユノちゃんいくつなの？」

「22歳でございます」

「22!?!」

あちゃー、あの顔でか！（失礼）

思わず素の反応を返してしまった。あの厳つい顔と鋭利な目で22というのも驚きだが、7年前ということは15歳で、国の英雄と言われる団長に？

ううむ、ジユノちゃんおそろべし。

「あ、ここが浴場となっています。お好きな時に入るようにとのことです」

「わー、広っ！」

あまりの広さにリニーの手を離し駆け出したら……コケた。

「うつつ、痛い」

「ネノ様っ。すぐに手当てを！」

ひょいっと抱きかかえられてマイルームへ。

「申し訳ございません、私が付いていながらっ」

「リニーは悪くないよ！勝手に転んだんだし！」

子ども相手にそんなに謝らなくても！

まだ若干痛む額にはリニーが丁寧に貼ってくれたガーゼが存在を主張していた。

「ですがっ、ネノ様の可愛いお顔に傷が！」

か、可愛い、だとう！？……いやでも確かに昔は可愛かった。昔の写真を見た後、今の私を見て両親が深々と溜息を吐くのを何度目にしたことか。

小さい時は皆可愛いものだが、その中でも私は可愛かったと思う。所詮過去だが。

だって近所のおばちゃんにこの前言われたのだ。

『音乃ちゃんったら昔は可愛かったのにね。今じゃ遅しくなっ
え！』

ってオイどついう意味だ。地味に傷付くじゃないか。ああでも、そんな近所のおばちゃんにも会うことはないかな。

ニコニコ動画が見れないのは残念だけど、あと家族と会えないのも少し残念だけど、異世界に憧れて7年。あ、ジュノちゃんが団長になった頃と一緒にだ。

てことは、私がニコニコ動画に熱中&小説読みながら異世界へ夢

見ている期間、ジユノちゃんは必死に団長務めてたのか。なんか温度差は物凄くあるが共通点を見つけた気分だ。流石ラッキーセブン。

「ネノ様……？やはり傷が痛むんですか！？」

「あ、え！？ 違うよ、大丈夫！ ちよつと家族のことを思い出してただけ！」

「そうですか。……大丈夫ですよ。リニーが居ますからね」

「うん……」

ジユノちゃん達にはトリップしてきたことは伝えてある。信じてくれたかは知らないが。

リニーはトリップが嘘でも親が近くに居ないとは思っているようだ。だから今もこうして……私が寂しいと思っただけ抱きしめてくれてるんだろつ。

……グツジョブ胸！ あ、別に変態じゃないよ？ただリニーは見た目によらずモフモフなもんで……あ、変態？

うーん、この胸に飛び込んでるのもいいんだけどまだ探索がなあ……。無意識に翼をパタパタしているとリニーの手が頭を撫でる。

「ネノ様、お庭を散歩しませんか？ 今日が天気が良いですし、気持ち良いですよ」

「ん、そうする」

名残惜しくも顔を離すと、再び手を繋いで外へ。

日中の陽気は暖かく、またも走り出したい気持ちに駆られたがりニーがガツチリ離さなかつたのでそれは叶わなかつた。

コケた時にも思ったが案外力あるねリニー。可愛い顔してるくせにね。胸あるくせにね。うん、ずるいね。代わりに翼バツサバサしといたよ。

「ねえリニー。ジュノちゃんいつ帰って来るの？」

「そうですねえ……今日は帰られない予定でしたが、ネノ様の為に帰って来るかもしれませんね」

「私の為？」

「はい」

それだけ言うと、優しい笑みを向けるリニー。

「ジュノア様はお優しいんですよ」

「うん！」

いきなり現れた少女を住ませるぐらいだからね。

「今回のことは驚きましたが、ジュノア様はネノ様が怖がられなかったことが嬉しかったんだと思います」

怖い？……ああ顔か！

うんまあ、熊とかライオン相手に顔で勝てそうな威圧感醸し出してるもんね！ってというか怖かったけどね！剣に手かけてたからね！

「ジュノア様はその……お顔で損をなさることが多かったので……」

寂しく笑うリニー。もしかしてジュノちゃんが好きなんだろうか？
美女と野獣の一步手前みたいな図が出来上がるけど……。

「リニーはジュノちゃん怖くないの？」

「初めて拝見した時は恥ずかしながら……ですが、今は尊敬しています」

目を輝かせて語るリニー。ジユノちゃん君も隅におけないね！
……ん、あれ、眠くなってきた。これは子どものお昼寝タイムっ
ていうやつか。立ち止まって目をゴシゴシこする。

「ネノ様？ 眠たいのですね？ お部屋へ戻りますか？」

ブンブンと無言で首を振る。せっかく気持ち良い陽気と風なのに
部屋に入るのは勿体無い。

「ではベンチに座りますか？」
「ん」

つれられてベンチへ座ると、ウトウトウトウト……子どもって体
力ないな。

「失礼します」

リニーの声が頭の隅で聞こえると、体が一瞬浮いてすぐに柔らか
なものが顔に当たる。これは……リニーの胸か！

ふわふわする意識の中、それだけハッキリ分かると次に声が聞こ
えてきた。…多分リニーの子守唄だろうけど……オンチだったんだ
ねリニー。

ああ眠いおやすみ……。結構子どももいいもんだと、小さく微笑
むと意識を手放した。

親しくなくても遠慮なし（後書き）

明けましておめでとうございます！今年も私の駄文をよろしく願
いします！

羊って何匹まで数えれば諦めていい？

「……………んにゃ……………」

「ネノ様おはようございます」

うーん……………あつ、思い出した！

「おはようリニー」

眠っている間に部屋に運ばれたようだ。

日が当たっていたであろう窓辺のソファにリニーが腰掛け、その膝の上に私が乗っていた。外はもう暗かった。

「ジユノちゃんは？」

「まだ帰られています。もう少しかかるかと……………」
「そっか」

団長っていつぐらいだからね。昨日がたまたま早かったのかもしれない。

「あちらで遊びませんか？」

あちら、と言われた方向を見ると……………お、お人形さんですね？あれは。なんてこった……………18にもなっていて……………。

「……遊ぶ」

断る理由が見当たらなかったのでしょうがなく人形を手取る。

「リカちゃん……」

「お名前決められたのですか？いい名前ですね」

違います。似てるんです。あんまり知らないけど。

「ではリカちゃんと遊びましょうね」

おk……17歳の年下とまさかお人形ごっこことは。ええい、ごうなりやヤケだあ！

「り、リカちゃんお着替えしようね！」

変に力んだ声になった気がするがそこは見逃して欲しい。
リカちゃんの服を脱がせてリニーを見る。

「あ、替えは……」

ほう……この中から選べと。

「じゃメイド服で」

せつせと着替えさせると完成品をまじまじ見る。……これジユノちゃんの部屋に飾ってどうだろう？

「お気に召しましたか？」

メイド服のリカちゃん？

「……うん」

そう答えるしかないよね？ね？よし決めたジュノちゃんの部屋へ持って行くぞ。

「それは良かったです。次は何をなさいますか？」

「うーんと……」

いやもういいんだけど。人形遊びしたことないから何するのか分かんないしな。ポケモンなら分かるんだけど。

リカちゃんを前に腕組みして考えている私を微笑ましそうに見ているリニー。

うーうーと唸りながら私の首が右へ45度傾いた時、扉をノックする音が聞こえた。

「お食事の用意が整いました」

おお、もうそんな時間？

「ネノ様参りましょう。リカちゃんも持って行きますか？」

「ううんいい」

それはもう速攻で答えた。真顔で。翼もバサツて開いて閉じたよ。

「分かりました。では参りましょう」

スッと差し出された手に、幾分か小さな自分の手を重ねると歩き出す。

・
・
・

夕飯時に言われた。明日になったら可愛い食器が届きますので、
つてすぐく申し訳なさそうに。別に普通でいいよ？とは言えない。
遠慮しない私だけどそこは言えないよ？

でもお風呂については言わせてもらった。

「一人で入れるよ!!」

うん。18だから。リニーがもんのすんごく心配そうに見てたけ
どね。コケたからね。18だけど。

一緒に入るというリニーを押し切って一人で入った。でも長湯す
るとまた心配されそうだから今日は高速で出た。

「ほら、一人で大丈夫でしょ!!」

とかも言つといた。翼を最大に広げて。そうそう、この翼洗うの
大変つてか洗うもんなのコレ？なんで飛べないのコレ？なんで生え
たのコレ？

結構大きいんだよね。しまえないから時々邪魔なんだよね。

で、今マイルームに帰ってきてあと寝るだけなんだけど…昼間寝
過ぎた所為か全然眠たくない。

今何時？今くじら!……ごめん。いやでもホントまだ早いよ!ニ

「厨の私は今からの時間が本領発揮なんだあ！それを……寝るだとう！？ムリだー！
ジユノちゃんもまだ帰って来てないみたいだしどうしようか？……寝るしかないか。リカちゃんと遊ぶ気にもなれないし。」

「……」

とりあえずベッドに入ってみた。目を瞑ってみた。羊を数えてみた。

「……このままじゃ羊エンドレスだよ！」

240匹羊が通過したところでやめた。部屋出てどっか行ってみようかな。

「そうしよ」

でも夜一人じゃなんとなく怖い……リカちゃんがいるじゃないか。ってことでリカちゃんをしっかり抱きかかえて部屋を出る。きよろきよろしながらリビングへ行ってみる。

「……ネノ？」

「っー」

びっくう！

リビングへ入って適当に見ていると後ろから突然声をかけられた。びっくりして翼がブワサアって開いちゃったじゃん。

ってジュノちゃんじゃーん！子どもの姿なのをいいことに思いつきり正面からアタックしてみた。ビクともしなかったよ。

「おかえり！」

「ああ。何をしていた？」

「眠れないから色々見てた！」

「夜に一人で部屋から出るな。危ないだろ」

口調は厳しいが私の頭を撫でる手はひどく優しい。慣れていない手つきだけど。

「はい」

「さあもう帰れ」

「やだ！ 寝れない！」

「それでも帰れ」

「やだ！ 羊240匹数えたもん！」

「羊…？」

「うん！ あ、ジュノちゃんの部屋で寝る！」

子どもだからね！普段なら言わないからね！

「……自分の部屋へ行け」

「やあだ！ ジュノちゃんの部屋！！」

「……今日だけだぞ」

「やったあ！」

「額のガーゼはどうした？」

「コケた！」

「大丈夫なのか？」

「うん！」

「それは？」

「リカちゃんだよー!!」
「……………」

テクテクとジユノちゃんについていくと私の部屋と少し違うデザインの扉が現れた。
ガチャリと開けてジユノちゃんが入っていくと私も足を踏み入れる。

殺風景ですね。

「どうした？」
「物少ないね」
「いつもはあまり帰らないんでな」
「そうなの？ これから帰って来ないの？」
「……………帰って来て欲しいのか？」
「うん！」

子どもは素直が一番！

「……………分かった」
「ありがとジユノちゃん！」

話し相手はいっぱい居た方がいいからね！

「もう寝ろ」

私の所より大きいベッドを指差す。

「ジユノちゃんは？」

「俺はソファでいい」

ちゃんとレディ扱いしてくれてるよ。驚きだよジュノちゃん。私まだリカちゃん人形で遊んでる年頃だよ？

ジュノちゃんはさっさとソファへ行って寝る準備をしている。私もベッドへ上がると、もぞもぞと動いて丸くなる。あーふかふか。あ、リカちゃんどうしようか。今更ジュノちゃんに渡すのも面倒臭いし枕の横でいいか。

……物音がしない。ジュノちゃん寝た？もそつと起き上がると……ジュノちゃんの目が開いて目が合った。

「……寝れないのか？」

頷くと真剣な目でこちらを見てくる。少し経った後歩いて来るとそのまま隣へ入ってきた。

「寝るまでいてやる」

疲れてるだろうに悪いねジュノちゃん。お礼にリカちゃん人形あげようか？

……試しに差し出してみた。

「なんだ？」

「あげる」

「……いや……いい」

なんとなく戸惑っている気がする。大の男を翻弄するって面白いかもしれない。

リカちゃんは起きたら勝手にこの部屋に置こう。あ、

「ジユノちゃんいなくても部屋入っていい？」

「かまわない」

「ありがとジユノちゃん！ おやすみ！」

「ああ」

この殺風景な部屋を、今度変えておこう。メルヘンにはしないよ！流石にかわいそうだからね！

リカちゃん人形を抱いてジユノちゃんの胸に擦り寄る。するとまたも不器用な手つきで髪を撫でられる。

ジユノちゃん顔に似合わず（失礼）爽やかな良いニオイするんだよね。

それまで全く襲ってこなかった眠気が不思議とやってくる。ジユノちゃんトリカちゃんの（？）暖かい温もりを感じながら夢へと旅立った。

羊って何匹まで数えれば諦めていい？（後書き）

ほぼ設定を決めていないので無茶設定が出てくるかと思えます。気にしないでください

あまりにも気になったら言うてください

人は顔じゃ分からない

「待てやバカ千歳ちとせ！！ 返せー！！」

「もう腹の中だつて言つてんだろ！」

「じゃあ切れ！ 腹切つて出せ！！」

「えええ！？ 出てきたやつどうすんの！？ 食つのか？！」

「知らん！ とにかく出せ！」

「無茶言つなつて！！ たかが食い物ぐらいで！！」

そこで私は千歳を追つのをピタリとやめる。

「たかが……？」

「あ、いや、じ、ごめん」

「ふ、ふふふ……」

「姉ちゃん……？」

私の食い物の怨み

「なめんなー！！……つてあれ？」

ああ…夢か。

嫌な夢見た。全くバカ千歳ときたら私の大好物のレアチーズケーキ

キ食べておいて、たかがとは失礼な。あの後きっちりうらみは晴らしたけども。

あー腹立ってきた。

思わず腕に抱いていたものに力を込めると、

「ぎゃー！！ リカちゃん！」

スポン、と体が上と下に取れてしまった。お腹が出てるメイド服も、エプロンとスカートが分かれている状態だ。

び、びっくりした。これ取れるのか。お腹辺りで分かれてしまったりカちゃんをよく見ると、案外簡単に取れる仕組みになっているようだった。

「全くもーびっくりしたなー」

ぶつぶつ文句を言いながら体を元に戻す。簡単に戻せた。いつそ半分ずつのままジュノちゃんの部屋に飾っておこうか。

……そういえばここジュノちゃんの部屋だっけ。

すでにジュノちゃんはいなくてももう出て行ったみたいだった。どこ行ったか知らないけど。あ、城か。王宮？だって団長だもんね。

うーん……、平和に暮らしたいけど、王宮は行ってみたいな。王子様とか一回は夢見るじゃん？特に私、中二病だし……！！

よくジュノちゃんみたいなのツツい顔（失礼）の人が護衛で後ろ歩いてたり……ってジュノちゃんについていけば会えるんじゃない？

「今日聞いてみよう」

涙目&涙声&首傾きで攻めればいけるかもしれない。よし、がんばるぞっ！！私の夢のために！バツサア！（翼音）

しかし！

向こうから昼過ぎに会いに来てくれた。

「何何？ この子？ 何あいつロリコンだったの？」

……皆さん大変です。現在、超絶美形が、私の目線に合わせながら微笑んでらっしゃいます。

口から出てる言葉はちよつと似合わないけど。でもそんなこと気にならないくらい今の私は目の前の顔に夢中だ。

言っておこう、美形は好物だ。中二病抜きにしても有り余るくらい大好きだ。レアチーズケーキと同等かそれ以上に好物だ。やばいやばい、翼がバツサンバツサンなるよ。

「口、ロイス様……」

遠慮がちにリニーがその人と呼ぶ。ロイス様？この人も偉い人なのか。

「君、名前何てゆーの？」

リニーを無視してロイス様は首を傾けながらニコニコと聞いてくる。それにドッキドキしながら答える。

「……音乃」

「そう、ネノ。ネノは何で翼生えてるの？」

それは私が聞きたい。そしてヤバイ。何がやばいって、この人の言う‘ネノ’って響きが、ああ……！！……変態？完全否定はしない。なんか若干ジュノちゃんと声似てるね。

ああそうそう、質問に答えないと。

「……わかんない」

「そう。ネノはジュノアのどんな所がいいの？」

ジュノちゃん？

「ロイス様……！ ジュノア様とネノ様はそのような」

「君には聞いてないよ。……さあネノ？」

この人めちやくちやカツコイイけど、ちょっと怖い。ジュノちゃんと同じ、藍色の瞳と銀髪。

「ジュノちゃんは」

優しくて、と続けようとしたんだけど、いきなり笑い出したロイス様によってそれ以上はしゃべれなかった。

「あっはっはっ！！ じゅ、ジュノちゃん！！？ やべっ、止まらねっ。ぐはっ。ジュノ……っ、ぶはっ」

なにがそんなにウケたのか分からないが膝をつけて体をくの字に折り曲げながら未だ大笑いする超美形さん。

「しまいに、ゲフツ、とか言い出したが大丈夫だろうか超美形さん
でみよ。くくつ」

まだ完璧に笑いが収まらないらしいロイス様だけど、私の頭に手を置いて軽い謝罪を繰り返す。

「あー笑った。ごめんねネノ。でも分かった、ネノはジュノアが大好きなんだね？うんうん、俺も嬉しいよ。あいつにこんな可愛い子が……」

「ロイス。何をしている」

あ、ジュノちゃん。今日は早いね。

ロイス様の言葉の途中で息を切らして入ってきたジュノちゃん。私とロイス様の間に入ると私を庇うように仁王立ちしてロイス様を見下ろす。

……ジュノちゃんどいてほしーなー。ロイス様が見れない。

「ちよつとちよつと、お兄様を呼び捨て？」

「えー!？」

驚きの声を上げた私を無視してジュノちゃんは続ける。

「何故ここにいる」

「ん〜？ ジュノア……違う違う、ジュノちゃんお気に入りの女性
を見に来た」

ロイス様は楽しそうに、「ジユノちゃん」の部分を強調しながらしゃべる。

ジユノちゃんの顔は見えないが、目の前の拳が震えた気がした。

「……帰れ」

「え、ひつどいな。そこの子、えーっと、リニー？ お茶お願い」

「はいっ！」

名前を呼ばれたりリニーは目を輝かせて飛んでいった。分かるよ、その気持ち。美形に名前呼ばれるとテンション上がるね。

ロイス様が動く気配がするとジユノちゃんも動く。おかげでロイス様が見えるようになった。っていうかさ、ロイス様言ったよね？

‘お兄様’ って。え？この2人が？

開けた視界で交互に2人を見る。……イヤイヤ。（地味に失礼）

「ネノも座りなよ」

ニコニコと自分の席の横を勧めるロイス様。つられてフラフラ歩き出すと、がしっ、と腕を掴まれた。

「危ないからこっちに来い」

おうおう、せっかくの美味しいチャンスが……！！翼をバサバサして抵抗の意を示してみるが伝わらなかつたらしい。

結局ジユノちゃんの隣に落ち着くと、リニーの淹れてくれたお茶をズズッと飲みながら2人の会話を黙って聞く。

「茶飲んだら帰れ^{それ}」

「ふふっ、そんなにネノが大事なの？」

「おまえが近づくと穢れる」

「中々言ってくれるけど、ジュノアにロリコンなんて趣味があったとは知らなかったよ」

「……何の話だ」

「まだネノは小さいんだからさあ、無理はダメだよ？」

「バカか。ネノはそのような対象ではない。おまえと一緒にするな」

「あ、違うの？」

「当たり前だ」

「なあんだ。折角ジュノアにオンナが出来たと聞いて飛んで来たのになー」

「……何処の情報だ」

「ん？ヒミツ。あーあ、護衛撤くの大変だったのになー」

「おまえはもう少し王子の自覚を持って」

王子！？

お茶を口に含んだまま、キラッキラした目でロイス様を凝視する。

……ん？ロイス様が王子なら……

「それを言うならジュノアの方でしょ。ジュノアは第三王子だけど、俺ら王位継承権放棄するからジュノアが王になってよ」

「ブバツ」

「ネノ様！！」

思わずお茶を噴出してしまった。それはもう見事に。翼もびっくりして全開だよ。

だってね、だって……ジュノちゃんが、第三王子！！？

この顔で！？（超失礼）

「ご、ごめんなさい……」

「ううん、いいよ。大丈夫？」

コクコクと頷くと、リニーと他のメイド達が拭いているのを手伝おうとする。が、リニーに目線で制された。

「その様子だと、言ってなかったのか」

「……言つ必要がないだろう」

「そう？ 別に言ってもその子は変わらないと思っけど。それより、どこの国の子？」

「分からない。本人は別世界だと言っているが……」

「へえ……。本当？」

「日本って聞いたことありますか？」

「ううん。そこから来たの？」

「はい」

「ふうん。不思議な話だけど瞳の色がねえ」

「ああ。黒の瞳は見たことがない」

え！そうなの？

「で？ ジュノアは隠そうとしたわけ？」

「そうじゃないが……ネノが慣れるまでは、と思っただけだ」

「…ネノ王宮に来るかいい？」

「ロイス、俺の話を聞いていたか」

「いいじゃん。この子は大丈夫だよ。ねっ？ 来る？」

なんだろうこの美味しい展開。

来るかって？そりゃ……

「行く！！」

「ほら」

「……まあネノがいいならいいが」

「じゃあもう行こっか」

早っ！！

「リニー、おまえも来てくれるか？」

「はい！喜んで！」

「それからジニス。届いたものは王宮へ送れ」

「畏まりました」

メイド長と思われる人が頭を下げる。

どうやら、夢の王子様に会えた上、王宮にも行けるそうです。まあ興味あるのは王子で王宮に興味ないんだけど。

あ、あと……人は、見かけによらないよね。

なんてジュノちゃんを見ながらしみじみ考えてたなんて内緒だ。

人は顔じゃ分からない(後書き)

ダメだ！宿題やってない！！
誰か力を…！！

苦勞人？ それは俺を指す言葉です。

わーお。デカっ！ 広っ！！

馬車から降りて見た王宮は予想以上に大きかった。子ども視点だから余計そう見えるのかもしれないけど。

圧倒されていると視界に、焦るようにドドドドと走ってくる人が見えた。

「ロイス様！つてジユノア様も！？」

その人は、超美形王子ことロイス様の元へ来ると私を見つけたようだった。うん、そこそこ美形。ロイス様には負けるけど。

「脱走話は後で聞くとして、その子どもは？」

その人の感じから、どうやらロイス様はよく、脱走、をするらしい。

「ネノだよ。これからここに住ませるから」

「はっ?! ついに幼女にまで手を!？」

「違うよ。ね、ジユノア？」

「……ああ。俺が保護した」

「ジユノア様なら確実ですね。分かりました、部屋を用意します」

「もう一つ用意しろ。侍女を連れて来た」

「分かりました。今からどうされるので？」

「訓練場に戻る」

「えっ。……訓練の途中だったんですか？」

「そうだったの？」

「そんな目をジユノちゃんに向けると、ポンと頭に手を置かれた。」

「そうだ。また後でな」

「うん。じゃあねジユノちゃん！」

「ジユノちゃん!!？」

その人がそう叫んだ瞬間ジユノちゃんはギロリとその人を一睨みし、そのままどこかへ歩いて行った。

「ジユ、ジユノちゃん……」

何でそんなにショックを受けてるんだろうか。

「くくっ、やっぱりそうなるよな。あー、レイルはどう言うかな」
「……いいんですか？」

「いいだろ。ジユノアがいいみたいだし。さて、俺は女の子の所にも行くかなあ」

「え!?! だめですよ! 仕事あるでしょ!?!」

「え〜? 硬いこと言うなよ」

「硬くないですよ! どれだけ溜まってると思ってるんです!?!」

「んん? 俺は溜まってないよ? 毎日発散して……」

「何の話ですか!」

「そうか、ロイス様もどっか行くのか。もうちょっと美形拝みたかったのにな。……あつ。」

「ねえロイス様。お城、案内して？」

そう言うと、ロイス様は私を見る。私は美形を拝みたいし、ロイス様は仕事から逃げたい。丁度いいじゃないか。

ロイス様はしばらく私を見てたけど、突然にやっとした。

「いいよ。今日の午後の時間はお姫様にあげる」

「何勝手なことを言ってるんです!？」

「勝手じゃないよ。ジユノアだって良いって言うよきつと。ネノに好きなことさせるって言うってたし。ねえリニー?」

「ええ!?! あ、はい!」

いや言っでなかったと思う。

「それなのにユザはダメって言うの? まあ俺はいいけど? 後でジユノアから何言われるか知らないk」

「ああもう分かりましたよ! どうぞどうぞ! お好きに何でもやっってください!」

ついに投げやりになったこの人はユザと言うらしい。呼び捨てがしっくりくるので勝手にユザと呼ばせてもらおう。

「あ、そう?じゃあユザも一緒に同行しようか」

「いや俺は他にすることが……」

「ネノ、ユザも一緒にいいよね?」

「うん! ユザと一緒にいい!」

「ほら」

「……」

ユザは開いた口を静かに閉じて、がんばって色々飲み込んだようだった。苦勞してそうだね、ユザ。そのうちハゲてきたりしてね。

「よし行こう。ああそうそう。ロイス様なんて堅苦しい呼び方しなくていいよ。あのジュノアをあんな呼び方してるんだから俺にもなんか考えてよ」

あんな呼び方ってそんなに酷かった？まあいいや……ロイスだから……

「アイス！」

「やめようか。ロイスでいいよ」

「……はい」

おお怖い。目元が笑ってなかったよロイス。思わず翼も縮こませちゃったよ！

城を案内しながらロイスは色々話を聞かせてくれた。ロイスは外面でもあるのか、今は言葉遣いが違っていった。最初から王子っぽくなかったが、今はもっとそれを感じる。顔は間違いなく王子様だけだ。

「昨晚ジュノアが大量に‘何か’を注文したって城で噂が広まったんだ。当の本人は知らないだろうけど」

噂とか疎そうだもんね。

「あいつあの顔だから女なんてまともには寄って来たことなかったんだ。性格は本当は良いんだけど、外見から離れてて分かりにくいし」

確かに。

「んで、そのジュノアが自ら店に足を運んで、物を大量に買ったっていう噂が飛び込んで来てな。もうこれはオンナだろうと。だから俺もその店に行って店主に何買ったか聞いたんだけど、震えながら答えてくれなくてな。仕方ないからどこに送ったかだけ聞きだしてジュノアの屋敷だったから、もしかしたら一緒に住んでんのかと思って向かったのさ。そしたらまさかのロリコンだった」

いやロリコンではないと思う。

ロイスは機嫌が良いのかよくしゃべっていたから、こっちからも友達感覚で接してみた。

「ロイスって王子様っぽくないね」

「ネノ様っ……！」

リニーが後ろから咎める声が出たけど、ロイスは気にした様子はない。

「ああ、俺王子とかやだしなー。子どもの頃は自由で良かったなー」

「今もロイス様は十分自由です」

ユザは引き攣った顔で告げる。

「足りない」

それをアツサリ否定するロイス。そういえば王位継承権がどうと
かってさっき言ってたな。

「ロイスは次期王様なの？」

「んーん。俺絶対ならない」

「ロイス様！」

「じゃあジュノちゃん？」

「俺はジュノアがいいと思ってるけど」

「ジュノア様は第三王子ですし、すでにこの国を団長という形で守
つておられてそれは難しいんです!!」

「だからユザががんばってジュノアの代わりになればいいんじゃない」

「……っ、努力はしていますが、残念ながら遠く及ばないでしょう。
ジュノア様は別格過ぎるんですよ」

「まー知ってるけど。あーあ、レイルなってくれないかなー。って
レイル今何処？」

「……分かっていません」

「はは、また逃げたんだ。今度はいつ会うかな」

レイル？

「レイルって誰？」

「俺の双子の兄」

「ロイス双子だったの！お兄ちゃんもカツコイイ!？」

「ああ、お兄ちゃんも」カツコイイな。俺の分身だからな」

なんてこった！超絶美形が2人!？これは……これはっ……やば
いやばい鼻血出そう。

「ネノ……? どうしたの?」

「なんでも!」

早く会いたいな。イケメンのツーショットってテンション上がるよね！あ、私だけ？そんなことないよね！

やっぱりいなー。翼がバツサンバツサンなるなー。あ、ごめんユザ邪魔だった？

「んー、訓練場がここから近いけど行くか？」

「行かない！」

それはもう即答で。

「ジュノアいるぞ？」

「行かない！」

むさ苦しい所はイヤだよ！

「じゃあ戻るか」

むふふ。

え、怪しい？しょうがないよ。だって今美味しいシチュエーションなんだから！邪魔しないで！！あ、涎垂れそう。

「ネノ、王宮は好きになれそうか？」

「うん！」

「俺も好きか？」

「うん！！！」

そりやもうイケメン大好物ですから！

「将来性ありそうだから今から予約しとくかなー」

「何をです……？？」

恐る恐るという風にユザが問う。

「ネノの婿」

ぐはあつ。嬉しい！嬉しいんだけど数年後私は突然変異が起きて、今（10歳）と比べて期待ハズレの顔に成長してしまうんだー！！！！無意識にロイスの胸に頭をグリグリ押し付けていたようで軽く剥がされた。

「痛い」

「じゅめん」

リニーは微笑ましそうちにこちらを見ている。傍から見たらキラキラの王子様が愛くるしい天使を抱いているように見えるんだろう。

今私は座っているロイスの膝の上において、ここはロイスの部屋らしい。ジユノちゃんの部屋と違って色々物が飾ってある。

「ロイス様……。幼女は勘弁してください」

「何も今って言っていないだろう？ 俺好みに自然と育てとくべきかなって考えたただけだ」

「ロイス様！！」

「ねえねえ明日どうするの？」

「俺は女の子の所」

「じゃネノも行くー」

「ネノも？ 困ったなー。両手に華だな」

「ネノお華？」

「ああ。ネノが大きくなったら俺と結婚しようか」
「する！！！！」

もうすっかりロイスとは友達気分である。ユザはスルー気味で。

「そつだ。甘いのは好きか？」

「うん好き」

「いい物やるよ。この前見つけたんだが……ユザ」

「はいはい」

分かったらしいユザは立ち上がり棚を開ける。可愛らしい飴玉のような包みを持ってくると、ロイスに渡した。

「ほら。全部持ってけ」

「ありがとロイス！ 大好き！」

「俺もだネノ」

「ちよつとロイス様。限度を教えてくださいね？」

「嫉妬かユザ？ 男の嫉妬は見苦しいぞ」

「見苦しいゾ！」

からかっているロイスを真似て言ってみた。

「あのね……。はあ……」

本当にユザはハゲてくるんじゃないだろうか。今度グチを聞いてあげよう。

知らない人から物を貰ってはいけません

ロイスはホントに女の所に行ったらしい。ユザが諦め気味に話してくれた。

それから案内してもらって、私は一人で図書館に来ている。昨日ロイスから貰った飴のようなお菓子を口に入れながら適当に歩く。

広い図書館の狭い通路を進んで行くと、古びた扉が現れた。

「むう……」

こつこつ扉はアレだよね。魔女がどうたらこつたらとかよく言うよね。ね？

ちよつと怪しいけど開けるのが好奇心旺盛な人間ってもんだよね。ね？

ん？翼に違和感を感じる……。なんかむずむずする。が、気にせず扉に手をかける。

「開いた」

そこは小さな部屋だった。机と椅子と窓が一つずつ。埃っぽくはなくて、人が出入りしていないわけでもなさそうだ。

なんだ、秘密の扉ってわけでもないのか。

椅子に座って机の上に置いてある薄い本を開いてみた。

……うーん、やっぱりトリップオプシオンなのかなー。初めて見る字が解読出来ちゃうんだけど。

表紙には【最高魔法全書】と書いてある。ペラリとページを捲ると【氷】と出てきた。色々殴り書きがしてある。

【後楽に光を 前世に償いを 満ちたるは青 想いは雫となり降り注ぐ 求めしは至点の絶氷】

呪文？よく分からないけど、ペラペラ捲ると【炎】【風】【雷】の魔法がそれぞれ記してあった。

そして最後のページには【究極奥義】だって。ゲームか！

【晴天に揺らめき炎は灼熱と化す 白雲に漂いし霧は氷結を成す 黒雲に渦巻くは猛然の雷 空に走るは一陣の風】

今度言ってみようかな。使えたらどうしよう。……まあムリか！
椅子の背もたれにドカッともたれて、もう一つ飴を放り込む。

しばらくそうして口の中で転がしていたが、窓の外が気になり、カリカリと噛みながら窓を開けた。

「森……？」

広がる緑。乗り出し気味で眺めていると、突然体に異変を感じた。

あやバ……

思った頃には遅かった。急降下する体。意識はそこで途切れた。

目が覚めたら森の中にいて、小川の近くに落ちたようだった。しかし周りを見ても上を見ても陽気が差し込んでいるぐらいで城は見えない。

どこも痛くない体を不思議に思いながら立つと……低い。視線がとつても低かった。

嫌いな予感がバンバンしながら小川を覗くと……写ったのはクリクリな目をした可愛らしい仔犬。きつちり翼付き。

「ワン……（ふっ）」

じゃねえよオー！！

どういうコト！？

ねえコレどーいうコト！！！？

なんで？なんで！？なんで犬！！？

幼児化トリップwith翼 の次がなんで犬！？

第二章・ツンデレ犬と王子様 みたいな展開！？甘いよ！こんな所に王子様いるはずないよオー！！

「わおおーん……！！！」

腹いせに精一杯鳴いてみた。…自分で言うのも悲しいが、負け犬の遠吠えにしか聞こえない。
空しく森に響く声。

「ヒンヒン……（どうすればいいんだよう！（わおーん！（ジユノ
ちゃんーん！）」

「くうーん……」

情けない声を出しながら森をトボトボと歩く。何も出したくて出してるわけじゃないよ！悲しい声が勝手に出ちゃうんだよ！！

何でこんなことに？思い当たるのは……

「グワン！！（飴か！！）」

ロイスめ！覚えてる！！

メラメラと心に炎を燃え上がらせていると、何かが森の奥から走って来た。

あれじゃないですかね。あの……

猛獣！

「ギヤウ！」

逃げねば……！

ソイツはドンドン近づいてくる。今の私の何倍もあるソイツと目が合うと、恐怖に足が竦んだ。

「きゃうん……。キャンキャン……！！」

ジュノちゃん……！……へるぶ、へるぶみ……！

しかしソイツは直接襲ってこず、口を開けた。

「？」

と、

なんか炎の玉迫ってきたー！

そうかそうか、この世界は魔法があるのか！動物も魔法使うのか……！

当たる直前、思わず翼を前に出して、防御の体勢をとった。……んん？熱くない？

翼を広げてみた。ソイツは不思議そうにこちらを見ていたが再び

口を開けた。

今度は数個の氷の塊が迫ってきた。
もう一度翼を盾代わりにしてみる。何か当たった感じはしたが痛くない。

……あれですね。

翼 最強 フラゲ

でもこれ防御には使えるけど、どうやって攻撃すんの？
突進？そんな勇氣ある行動出来るわけないでしょ！！

翼最強説が浮上したおかげでちよっぴり強気になった私はソイツと強く睨みながら対峙する。

そこへサク、と左の方で枝を踏んだような音が聞こえると、続いて

「『駆ける想いは疾風となる 見つめる先に吹くは正か負か 一心に追うは誰が為 迎える終焉に突き立てる風刃』」

つい先程、本で読んだ呪文が聞こえた。そしていつの間にか、目の前のソイツは血だらけで地に伏していた。

……ちよつとちよつと、グロいんですけど。
恐々声のした方を向いてみる。

「うわん！（ロイス！）」

王子様いたー！！

そこに立っていたのは超美形ことロイス。髪色は昨日と違って金だったけど、あの整い過ぎてる顔はロイス。

なんでここにいるんだろう？今日は女の所じゃないの？髪金に染めてきたの？あの飴はなんだ！

等々問いたいことは、ユザの抜け毛ぐらいあったが（知らないけど）いつぱい抜けてそうじゃん）、とりあえず礼は言ってる！

「うおーん！（ありがとー！）」

ただだ、と走って行ってジャンプすると、受け止めて抱きしめてくれた。

「はは、そんなに怖かった？よしよし、可愛いなおまえ」

なんかロイス性格違う？

「くんくん！（音乃だよ！）」

気付いて！翼あるでしょ！！

翼をバサバサと動かす。

「珍しいな。どこから来たんだ？城へ持つて行くか……？でもなあ」

なんか一人で悩んでいるらしいロイス。早く私と気付いてくれないうだろうか。ジュノちゃんだったら分かってくれるかな？

「ワン！クン……」

「何だ？お腹空いたか？」

違います。城へ行くこうつて言いたいんです。

「森を抜けながら決めるか」

どうやら一人で納得されたようです。

「このまま戻らなかったらどうしよう？そしたら恨むぞコンニャロ
ー！」

そんな視線をロイスに送ったが、全く通じていないみたいで頭を
撫でられただけだった。

まったく！そんな手口には騙されないからね！撫でられてウトウ
トするぐらい気持ち良いとか思ってたないからね！！
こうなりゃツンデレでいってやるからね！！

「眠いのか？ 置いていかないから、眠ればいい」

「そそそんなデレ出そう作戦に引つかからないからね！でも眠いよ
ー！！」

「どうした？ 寝ないのか？ 名前はそうだな……珍しいからなあ
……。珍チンでいいか」

待て。

眠気も吹っ飛んだ。

「グオン！ ウワウ！！ ギャウ！！！」

「そんなに気に入った？チン」

「グオウ！（イヤだー！）」

なんて会話(?)をしていると森の出口が見えてきた。元々城か

ら落ちたんだから近かったんだろっけど、一人じゃ当分抜け出せなかっただろう。

「さー、今日は何を言われるかなー」

「クン？」

「ん？ ユザっていう面白い奴がいるんだ。アイツも俺達より若いのに大変だなー」

ユザ。良かったね、面白い奴だって。

森を抜けて空を見上げると、少し飛び出している部屋が見えた。恐らくあそこから落ちたんだろっ。

無傷だったのは翼のおかげ？

黙って考えている私の頭を相変わらず撫でながらロイスはゆっくり歩く。

細い道や入り組んだ道を進むと、城の中に入ったようだった。

ようやく広い場所へ出ると、兵士が何人もいて一人がこちらを向く。

「レイル様!!」

「ただいま」

レイル？

ポジティブは素晴らしいが時に厄介である

レイル……レイルレイル……どっかで聞いたような……

「……ブオン！！（双子兄！！）」

しまった、興奮が声に出ちゃったよ。

「どうしたのチン？ 大丈夫？」

いきなり奇声を発した私を怪訝そうな目で見てくるロイス。……
じゃなくてレイル王子。

なんてこった。流石双子。ロイスと顔似過ぎだなオイ。それとチンじゃないよ 音乃だよレイル君。

「クウン……」

周りの視線とさっきの奇声を思い出してちょっと恥ずかしくなりながらも大丈夫と返事をする。伝わってるか知らないけど。

「レイル様、今まで何処に……」

大勢の兵士が頭を下げる中、一人が前に進み出て、言葉を発す。

「ん？ 内緒。俺とチンのヒミツ」

「わふう（チンじゃねえよ）」

「チン、とは？」

「この仔。かわいいだろ？ ここで飼うことにし」

「レイル様！！！」

レイルがしゃべっている所にもうダッシュで走ってきたのは、ハゲると噂（私の中で）のユザ。

「やあユザ。久しぶり〜」

「久しぶりじゃないですよ！ どこ行ってたんですか！」

ユザは一目散に走ってくると、乱れた服を整える事もせずしゃべり始める。

「だから俺とチンとのヒミツだって」

「チン！？ってその獣は？」

「この仔がチン。ミシユケルゲに襲われてる所を保護した。ここで飼うから」

「はあ！？ そんなまだ安全かも分からない獣を置くなど！！！」

「大丈夫だよ。な？ チン」

「うわん！（チンじゃないけどね！）」

「ほら」

「なにがほらですか！ってこの翼、どこかで見たような……」

おお、ユザその調子！思い出して！ついさっき見たでしょ……！

「この翼珍しいだろ？ミシユケルゲの攻撃も防いだんだ」

「え？ ミシユケルゲの？……ということは、レイル様は森にいたんですね？」

「あ、しまった」

うっかりしゃべっちゃったらしいレイル。ミシユケルゲというのはあの猛獣のことだろうか。

ん？なんで攻撃防いだこと知ってるんだ？……ずっと見てたのか！すぐに助けてくれたわけじゃないのか！

「うづうづうづう」

コンニヤローという意味をこめて、とりあえず低く唸った。

「唸ってますけど」

「だろ？俺に懐いてるだろ？」

「そうは見えませんが。唸ってるんですけど」

「分かってないなあ。これは照れ隠しさ」

待て。なんか会話おかしくないか。なぜレイルは得意気なんだ。

「俺に懐かない動物なんていないさ」

まあ今は犬だけどさ。元人間だからね。

顔がいいからって全ての女が落ちると思うなよ！！

「グルルルッ」

「唸りが酷くなってますけど」

「ははっ、ツンデレだなあ」

そう笑いながら頭を撫でるレイル。なんとというプラス思考。いやナルシスト？動物に？

撫で方が絶妙で甘えたい気分になるが、そこは我慢。そうだ、コ

イツは私がピンチの時に傍観してたんだ！

「ん〜、この翼触り心地いいな。なあユザ、そう思わないか？」

レイルが言うと、ユザが手を伸ばして来て、翼に触れようとする。

「グワン！！ グルルル……」

牙剥き出しで睨みつける。乙女のお顔が大変なことになっている気がするが今は犬。気にしないでおこつ。

触ろうとしたユザが悪い。誰がユザなんかに触らせるか！触っていいのは超イケメンだけだ！！

「くくつ、嫌われたな」

「なんなんですかもう……。まあいいです。レイル様は部屋に戻ってください」

「え〜、なんでだよ」

「仕事如山積みでしょう。その獣も一緒にいいですから」

「え〜。あ、そういうえば、ジュノアの女は？」

「え？……ああ、どうも勘違いだったようですよ」

「勘違い？」

「はい。さあ、部屋へ」

ユザはこの話題を早く終わらせたいみたいに思えた。ジュノちゃんの話は私だよね？まあ確かに勘違いか。まさかの幼女だもんね。

「まあまあ、一服してからにしようよ。ね？」

「……分かりました。では用意を致します」

「さあすがユザ。分かっている」

軽くユザの肩を叩くと、レイルは歩き始めた。

着いたのは殺風景な部屋だった。物は少ないけど、難しそうな本が数冊置いてある。

ベッドがあるということは誰かの部屋？ロイスの豪華な部屋からして、レイルという可能性は低いような。双子って好み似るんだよね？

来客用にしては広い気もするし、うーん。

「ふー、やっぱり我が家が一番だねえ」

我が家ってか。広いな。

「そう思うなら大人しく城に居て下さいよ」

「ん〜、でもやっぱり刺激は大切だからしょうがないよ」

「こっちの身にもなってください」

「大丈夫、そう簡単に死なないよ」

「そうじゃないでしょう……」

レイルとユザが痴話喧嘩（違う）してる間、自由になった私は部屋をトテトテと歩く。

……ベッドの下にエロ本とかないだろうか。

……なかつた。

「わふん」

ちょっと残念。

「チン？ 何してるの？ こっちへおいで」

「わふ…！」

後から行く！

せつかくのイケメンからのお誘いだけど、今忙しいの！そんなに軽い女でもないの！

そんな深い意味を込めて返事をすると、またトコトコと歩く。

「……そっか、ごめん。俺が軽率だった」

あれ？なんか通じちゃってるよ！どんだけ乙女心に敏感だよ！いや動物限定？

びつくりして振り向くと、フツと微笑まれた。

ああ、こりゃ落ちるわ。……私以外。そうさ、何度も言うが、顔が良いからって全ての女が落ちると思うなよ！

……ん？なんか見覚えのある物が……。

「うおふっ」

「チン？ なんかノドに詰まった？ 食い意地張っちゃダメだよ」

違います。拾い食いなんてしてません。どうも懐かしきリカちゃんが見える気がするんです。

レイルが歩いてきて私を再び腕の中に収める。

「ほら、口開けてみ？」

「フウーン！」

食ってねえよ！

それより何でリカちゃんいるの！？

「痛くしないから……」

「ゲルル」

「大丈夫、すぐ終わる」

「ウウウツ」

「チン、いい子だから力抜いて？」

「クーン」

「……なんか段々違う場面が浮かんできたんですけど」

「何ユザ。欲求不満？」

「いや違いますけど。普通に口開けさせたらいいじゃないですか。

あとチンって名前おかしいと思うんですが」

「そう？ チンも気に入ってるようだよ？」

「ガルルルル！」

「……気に入ってるんですかソレ？」

ユザ！ 偶には良い事言う！ っていうか、そろそろ気付け！ 翼を思い出せ！

「ワンワン！」

ユザに向かって翼をバタつかせながら吠える。

「なんですかいきなり」

「どうしたチン？……ちょっと翼落ち着かせて欲しいんだけど」

「わふ」

あ、ごめん。

レイルの腕の中でバタつかせた結果、ユザに全く伝わっていない

挙句、レイルに迷惑をかけた模様。

うーん、どうしたら伝わるだろうか？

少し気分も翼もシヨゲ気味に考えていると、バンツと扉が開いた。

「よおレイル。やっぱり帰ってたか」

「ああロイス。ちょっと面白い動物を発見してな」

現れたのは今度こそロイス。その髪は昨日と同じで銀髪だった。

こうして見ると本当にソックリだ。銀髪と金髪の髪色ぐらいしか違いが分からない。

交互に見ていると、ズイッとロイスの顔の前に体を持ち上げられた。

「かわいいだろ？」

「そうだな。俺はお嬢ちゃんの方がいいが」

「グルッ！」

「うお！」

惜しい！あとちょっとでロイスの鼻を噛めたのに。

「なんだ人見知りか？」

「グルルルウ」

ロイスめ！あの飴のせいでこんな事になってるんだ！

「小型な割に凶暴なもん拾ってきたな」

「俺に対してそんなことはない」

「顔は似てんのに……んっ？ この翼どこかで……」

「わふっ！」

おおおロイス！分かってくれたら今回のことはチャラにしてあげる！！

「……いや気のせいか」

「わふう！」

早ッ！気のせいじゃないから！！

「だろ？ だって俺も初めて見たし」

そりゃアナタは森が初対面でしたから！！

「ああ、そうだな。見間違えた。よくあるよくある」

よくないよ！！

これだけ綺麗な翼を何故忘れる！！？早く気付けよ、ロイスもユザも！！

持つべき友は外見ではなく内面

「で、コイツ飼うのか？」

「コイツじゃないよ。チンだよ」
「グル」

違うよ 音乃だよ。

「チン頭いいみたい。多分こっちの言葉理解してる」

「わふ！」

「ホントか？ じゃあチン。俺は起きたら女にキスをするか髪を撫でるか、どっちが先だ？」

「グオン！！（知るか！！）」

どんな質問だ！てつきり、右手挙げてとか言われるのかと思って
手準備してたのに！

「分かってないぞ？」

「おかしいな……」

おかしくないよ！むしろそっちがおかしいよ！！

「ワン！ ウオウ！！ ギャウ！」

「さっきからなんか訴えてるよっに思えるよね」
「そうだな……」

そつだよ！

「ジュノアって動物と会話出来たっけ？」

「あー、どうだったかな。出来そうだな……」

「わふう」

顔は野生の王だもんね。

「失礼なこと考えてません？」

「そんなことないよ。ジュノアは今どこに？」

「訓練場です」

「ふーん。……行く？」

レイルは私を見ながら呟く。うーん、早く分かって欲しいけど……

「グルル！（汗臭いのはイヤ！）」

「そっか。それじゃあジュノアが戻ってくるのを待とうか」

だからなんでそういうのは伝わる！？

くそう、この美味しい状況を素直に楽しめないなんて！

超イケメン二人と部屋に居るというのに（ユザ？……居たっけ？）

こんな姿じゃ抱きつけない！！

「おい、どうした？」

どうしたもこうしたも、全部おまえの所為だ！

でも……でも責めきれない！だってやっぱりカツコイイんだもん

……！

「こっち来な」

そう言ってロイスはレイルの腕から私を引き抜く。

「うっうっ」

あなたの所なんて行きたくないんだからっ。か、顔がいいからって騙されないんだからね！

「唸ってるけど……しっぽ、揺れてるぞ？」

「うぎゃうっ」

しまったあああ！

この正直者め……！ そんな意味を込めてしっぽを思い切り噛んでみた。

「ギャン……！」

いいイタイッ。

皆さん、犬のしっぽは大事にしましょう。

「くく、可愛いなコイツ」

「だからチンだって」

「わふっ！」

だから音乃だって！

「んー、よしっ」

何かを決めたらしいレイル。ユザは何かを悟ったのかすごく嫌そ

うな顔だ。

「ユザ。ジュノア呼んで来て」

「無理ですよ！ 今訓練中ですよ！？」

「ほら早く。チンもそう言ってるよ？」

「ワン！」

そつだ！ 早く行けユザ！

「知りませんよ！」

「二人の名前使ったら来るだろ。ユザ行って来い」

「ロイス様まで……！！ ああもう分かりましたよ！ それでは行って参ります」

パタン、と閉まった扉。ロイスは私を抱いたままドサツとソファに腰掛ける。

「レイル……王になれ」

静かなロイスの声。向かい側のソファに座ったレイルは私の顔を見る。

「嫌に決まってる」

「ユザがうるさいんだ」

「はは。本気で家出する？」

「ふっ、出来たらしてる。ジュノアはよくやるよ」

「なんで俺等が先に生まれちゃったのかなー。ジュノアが先に生まれてたら押し付けてたのに」

「今でも結構押し付けてるけどな」

そうなのか。

「大体俺はもう王になってるし」
「それ動物界のдар。しかも自称」
「バレた？」

サラサラの金髪を揺らしながら、茶目っ気タツプリにレイルは笑う。……ダメだ、惚れそう。顔が良いって絶対得だ。

「ロイスがなつてよ」
「イヤだ。レイルの方が合つだろ」
「どこらへんが？」
「金髪」
「わふ」

待て待て。

「ほら、チンもそう言ってるだろ」
「グル」

言っていないよ。

「でもさあ、冗談抜きにそろそろ考えないとね」
「ああ」
「あ、良い方法思いついた。……ジャンケンしようか」
「ワン（コラ）」
「ん？ チンも参加する？」
「グルル」

しねえよ。

「この国は本当に大丈夫か？次期王をジャンケンで決めるとか王子が言っているものなのか。親の顔が見てみたい。あ、現王様か。」

「最高魔法使える子が生まれなかなー。そしたらその子に継承権譲るのに」

「今は少ないからな。最低、使えなくても魔法書を読めるだけでいいから現れてくれるといいんだが」

魔法書？もしかしてあの図書館の部屋にあった本だろうか？えっと確か……ああそうそう、最高魔法全書。

あれれ、読めちゃったんだけど私。え？すごいのか？

「そういえば大分扱えるようになってきたよ。さっきチン助ける時にミシユケルゲに使ってみた」

「あー、最近使っていないな。レイルは風だったな。……っておい、一歩間違えればチンもお陀仏だったじゃねえか」

「大丈夫、本番に強いから」

「ワン（コラ）」

ふー、と同時に溜息を吐く二人。流石双子、息が合ってる。

「まあ……ジユノアはどっちにしても、王は無理か」

「ああ。国民受けが良くないからな」

ジユノちゃんが？優しくして強いんならピッタリじゃないの？

「あれもどうにかしないと、後々響くかもな」

「全く、内面は俺達がキツチリ躡けてあげたから完璧なのになあ」

あなたが躡けたら良くはならないんじゃないじゃ……？

ジュノちゃん、よくぞあんな良い子に育ってくれた！知らないケドー！

しばらく経つと扉がいきなり開いた。

「何の用だ」

「ワン！（ジュノちゃん！）」

「ジュノア久しぶりだね」

「……そうだな。で、何の用だ」

早く訓練に戻りたいのか少しイラ立っているように見えるジュノちゃん。

ジュノちゃんに飛び付いていつて分かって欲しいような、イケメンの腕から抜けたくないような……。

「動物と会話出来る？」

「……は？」

「いやこの子がさっきから何か言いたげなんだけど、俺達分からなくてね」

レイルはそう言って、ロイスの腕の中にいる私の頭を撫でる。…

…やばいよ皆さん。イケメンの双子に挟まれてるよ。ぐっはぁ。

「そんなこと呼んだのか」

でもジュノちゃんは私の方を一切見ずに、イラ立ちが増した声で告げる。そりゃ、大事な訓練中にこんな事で呼び出されたら腹が立

つのも分かる。

「ユザ、俺は戻る」

「あ、ジユノア様！」

ジユノちゃんのマントがこちらを向いた時、私はレイルの腕の中を翼を広げて勢いよく飛び出した。

「うお」

「キャン！ ワンワン！！」

あまりに必死だった声の所為かジユノちゃんが振り向く。

……待って！私今飛んでるー！！！！

「おお、飛んだ」

なんてロイスの間抜けな声が聞こえた。

「ワン！」

私はそのまま振り向いたジユノちゃんの胸に飛び込んだ。……くんくんくん。よし大丈夫。汗臭くない！！

訓練途中なのにね！不思議だね！ってか今飛べたね！不思議だね！

「くーん（音乃だよ）」

「この翼……」

「わおふっ」

「ネノ、か……？」

「きゃうーん！（さっすがジユノちゃん！）」

「え、ネノ？」

「ギャン！ ウォン！（そうだよ！ バカロイスめ！）」

「そういえばネノ様の翼と似ていますね」

「グワルル！（だからそうだよ！ ハゲてしまえ！）」

「何？ ネノって何？」

「ああ、レイルは知らないか。ジュノアが保護した子がいるんだ。でもなんでそんな姿になってるんだ？」

「グオン！」

おまえの所為だ！！……多分！

ロイスにグルルル唸っていると、ジュノちゃんが私の頭を撫でる。傷つけないように、優しく……。

……仕方ない。ジュノちゃんに免じて唸るのはやめてあげよう。単に気持ち良くて唸れなかったただけだけど！

「……ユザ。アイツらに伝えて来い。今日は終わりだと」

「え！？ ですが……」

「早く行け」

「はい……」

何か反論しようとしたユザは、ジュノちゃんの一睨みで去って行った。

持つべき友は外見ではなく内面（後書き）

今更思ったんですが幼児化って、もしかして6歳ぐらいまで戻らなきゃいけない……？

え、どうしよう……。いや、しょうがない！

本を隠す理由は多々あるが多くはアレだ。

「ネノ、何があった？」

「クン……ウワウ！ ギャン！」

「ジユノア分かるの？ すごいね」

「すごいな」

「……………分からない」

「ウオン！！（分からないのかよ！！）」

ん〜、戻らなかったらどうしよう？

「キャウン！！（お嫁に行けない！！）」

「大丈夫、俺の所においで」

「わふっ」

喜んでっ。

「なんだレイル、言葉分かるのか？」

「時々ね」

乙女の心に敏感だからね。

「……………ネノは獣だったのか？」

「ブホ！？ ウワン！！」

人間だよ！ちょっと怪しい所も変態な所もあるのは認めるけど、ジユノちゃんよりは人間に近い気がするよ！！

「あ、ジユノア。風呂行って来なよ」

「何故だ」

「汗臭いでしょ？ 女の子は嫌がるんだよ。教えたでしょ？」

「……ああ」

教えたのか。

ジユノちゃんは私を降ろすと違う部屋へ入って行く。素直に言う事を聞けらしい。別に臭くなかったんだけどな。臭かったら自分から離れるし。

降ろされた私はなんとなく寂しくなっただけでレイルの元へ歩く。

「どうしたの？ 抱っこする？」

「わふ」

「ん」

レイルの腕の中で丸くなるとシャワーの音が聞こえた。

「なんでチンはあるんだろーね？」

「わふう」

チンじゃないよ。

「ああごめん。ネノだったね」

だからなんで分かるんだ。

「城の探検でもして迷ったんじゃないか？」
「ワン！」

失礼な！ロイスの所為だよ！

コンコン

「はい。なめに？」

ノックする音にレイルが返事をする。

「リニーという侍女が面会を希望しています」

リニーですと！？

「リニー？」

「ジュノアの侍女だ。いいだろ、入れる」
「はっ」

ソロソロと扉が開いて、入ってきたリニーは泣きそうに見えた。走っていかうかと思っただけ、雰囲気的にしくかった。

「あ、堅苦しいこといいから、要件どうぞー」

「はい……………、あの、ユザールド様がここにいるとお聞きしたのですが……………」

ユザールド？誰だ？

「あー、もう帰ってくるんじゃないか？もしかしてネノか？」

「はい。図書館へ行ってもお姿が見えなくて……………」

「はいコレ」
「わふ！」

コレてか！ 酷いなレイル！

「え？」

「よく分らないけどこんな姿になっちゃったみたい」

「翼に見覚えあるだろ？」

「そういえば……、ネノ様の翼です。ネノ様なんです……良かつた」

そう言つとリニーの瞳から涙が零れる。

「うおふっ」

レイルの腕から飛び出してリニーの周りでオロオロしていると、レイルが歩いて来て再び抱き上げられる。

「ほら、泣かない泣かない。ケガも無いし、ジュノアもこのことを知ってる。いつ戻るかは分からないけど問題ないでしょ。君が泣いてるとジュノアに怒られそうだ」

「はい、ありがとうございます……。あの、ジュノア様は？」

「ん、風呂」

「あ……」

レイルがシャワーの音のする方を指差すと、リニーが頬を染めた。
……可愛いなりニー……！！

「ブフフ」

「……大丈夫ネノ？」

「わふ！」

何の問題もないよ！

思わず漏れた声に恥ずかしくなりながら、翼をバサバサさせてその場を取り繕う。いや出来てないけど。

それから少ししてリニーの涙も止まった頃、扉が再びノックされ、こちらが何か言う前に扉が開く。

「ただ今帰りました……って何泣かしてるんですか!？」

ユザは入って来てリニーの顔を見ると、即座にレイルに焦点を移す。

「え、あ、違うんです！ これはっ」

焦るリニーとユザに対し穏やかに笑っているレイル。と、後ろで忍び笑いしてるロイス。そこへ風呂から出て来たジユノちゃんが混じる。

「……リニー？ 何故泣いている」

「えっと、あの、あのっ……」

もうリニーはパニック状態みたいだった。再び瞳に涙が溜まりかけている。……可哀想になってきた。

「レイル……」

低いジユノちゃんの声。

「俺？ ロイスだよ」

ジュノちゃんの鋭い視線がロイスへ移る。

「くくっ、ややこしくなるからもうやめろ」

「そうだね。あのね、ネノが無事って知って安心して泣いちゃった
だけだよ。誰もいじめてないから」

「そうなのか？」

心なしか優しい声色で尋ねるジュノちゃん。

「はいっ、申し訳ありません……」

「いや、いい」

「ああ、ネノ様を探していたのか」

「はい、ユザール様にお聞きしようとしてここに……」
「なるほど。ごめん伝えるのが遅かったね」

ユザはそう言つとりニーの頭を撫でた。
って、

「ブホッ!？」

え!？

ユザールドってユザ!！？

ユザじゃなかったのか!!

「どっしたのぞ」

「わっふう」

いやなんでもない。よく考えれば別にユザの名前がなんだろうと関係なかった。

そんな思いを込めた言葉は、

「ユザに冷たいんだね」

きつちりレイルに伝わったらしい。

あ、ユザの顔が引き攣ってる。また厄介者が増えたとか考えてそ
うな顔だ。

「おい、立ってないで座るぞ」

「ああそうだね」

「来い」

リニーに向けてジュノちゃんが言う。

「失礼します……」

恐縮しながらリニーがジュノちゃんの隣へ座る。私はレイルの腕
を抜け出しリニーへ擦り寄った。

ホントはね、ホントはだよ？リニーもいいんだけど、イケメンズ
の腕の中がいいんだよ？

でもね、リニーが可哀想じゃないか！男達に囲まれて、位が上の
人達ばかりで。

「ネノ様」

「わふ」

「ありがとうございます」

「……わふ」

分かつたらしい。……これはこれで照れるものがある。

「で、いつ戻りそうなんだ？」

「えっ俺ですか！？ 知りませんよ！ レイル様分らないんですか？」

ジュノちゃんに聞かれたユザは焦ったように聞き返す。

「うーん、人間から動物になったなんて俺も初めて聞いたしなあ。なんか変な物でも食べたんじゃない？」

「ワン！ワン！！！」

そう、そうなんだよ！！飴だよ！！

「なんだ拾い食いか？」

「ウオウ！！！！」

おまえだよ！！！！

「……ロイスの所為なの？」

「キャウン！！！」

「そうみたいだよ？」

「俺か？」

「あ、アレじゃないですか？ あのお菓子」

「あ」

「グワン！！！」

あ、じゃねえよ！「あ」じゃ！！

「ロイス、何をした」

「いや何をしたというか、そこらへんの婆さんから菓子を貰ったんだ。で、それをネノに……。そうか、そんな作用があったのか」

そこらへんの婆さんってなんだ。どこらへんだ。すごい怪しいぞ。王子がそんな簡単に物貰っていいのか。

「よしユザ。今日中に婆さん探し当てて、あの菓子について聞いて来い」

「俺ですか!？」

「そうだ。がんばれよ」

「ああもつつ、はあ……。では行って来ます」

大変だなユザ。

「わふ」

でも私の為にがんばれよ。

「さて、戻るまで誰かの部屋で飼う?」

「わふう」

飼うってか。いや犬だけどさ。

「というか、俺の部屋に来る?」

それはそれはキラキラのスマイルで誘ってくれましたよレイルさん。そりゃ断るわけないでしょう。

「ダメだ」

「グル!」

何故！

それはもう高速でジュノちゃんを振り返った。

「危険だ。俺の部屋でいい。大体戻って来ない日があるだろ」

ああ、女の所ね。

まあ顔だけでいったらジュノちゃんが一番危険だけどね。

「危険って失礼な。俺は女の子には紳士だよ？」

「あ、俺もな」

ロイスはテーブルの上のお菓子をつまみながら言う。

「ロイスは普段猫被ってるでしょ」

「その時は紳士に変わりない」

やっぱりロイスは使い分けてるのか。

どつりで最初の印象と今が違うわけだ。

「とにかくネノはここにいたらいい。いいいな？」

「わふ」

って、こじこじ？

ここはジュノちゃんの部屋なの？あ、だからリカちゃん……

「ウワウ！」

そつだリカちゃん！そうかそうか、ジュノちゃんの部屋なのか！

そりゃエロ本もないはずだ！！

「夜は俺の部屋にいる。あとはリニーを連れて行けば、城の中なら自由にしろ」

「ワン」

「いい子だ」

リニーの膝の上に座っている私を、ジュノちゃんは撫でる。

「ジュノアに動物飼わせるっていいかもしれない」

「アニマルセラピーか？」

「うん」

「別にアイツ必要ないか？」

「そうかな」

「ジュノアが愛くるしい動物を愛でてるってのも和むといえは和むが。ちよつと笑えるぞ」

「まあね」

なんて会話が内緒で交わされていたなんてことは、私達は知らない。

本を隠す理由は多々あるが多くはアレだ。（後書き）

この小説に出てくる魔法の詠唱は、その時テキストに考えたものなので意味とか追求しないでやってください
全ては響きですー！

あ、あと各話のタイトルも思い付きです。話にちょっとでも掠って
いたら許してあげてください。今回はエロほろろ）
他に思いつかなかったんです！ ごめんなさいー！

記録と規則は破る為にある

ワンコロ生活3日目。今日も隣には動物好きのレイル。
なぜかレイルと意思疎通が若干出来るようになった。

「わふ（それちょーだい）」

「ん、これ？ いいよ」

貰ったのはレイルが食べていたおやつ。ポーロみたいで食べやすい。

「ネノ、あーん」

「わーん」

受け渡し方は可愛いがバリポリ音を立てながら食べる私はあまり可愛くないだろう。

でもしょうがない。だってレイルが一気に5個も放りこむんだもん。

「っ、ごぶ」

ぐえ、変なところ入った。

「大丈夫？」

「……きゃう（なんとか）」

「よしよし。はいミルク」

「きゃん（水がいい）」

「はい水」

ゴックゴック。

「ゲフ」

「ん、治まったね」

「わふ」

ふわっふわのソファにレイルと座る私。それを見守るリニー。と、
ユザ。

「わふう」

早く元の姿に戻りたいなあ。

レイルに可愛がられてる状況もおいしいけどね。

「俺はもうちょっとこのままでもいいよ？ 可愛いくて仕方ない」
「グルル」

でもトイレ不便なんだよ 知ってる？

部屋の中と、人間のトイレと同じ場所の二つに設置してあるけど、
部屋の中でするならみんないるし、

トイレ行くにもレイルに言わなきゃ行けないし、どっちもちょっと
と抵抗がある。

「でもそうだね……戻ったネノも見てみたいね。天使みたいなんだ
るっっ？」

「わっふ（そりゃもう）」

今だけね。数年後にはアレだけど。

「そろそろ効果が切れる頃だよね」

「クン」

今日か明日くらいだろう。

あの日、ロイスに命じられてお婆さんを捜しに行ったユザは、命令通り日を越す前に戻って来た。お婆さんをおんぶして。

息を切らしながらも時間通り帰って来たユザが、いつもより少しカッコ良く見えたのは内緒だ。

ユザが何故お婆さんを連れて来たのかよく分からないが、あの飴は色々な効果があるらしく、今回は‘獣化’だったらしい。

大体1日〜5日の効力で死に至るようなものはないとも言っていた気がするけど、夜遅かったからあまり覚えてないのが正直な所。

ま、大丈夫だろう。

だが心配なのは説明を聞いていたロイスが、私を見ながら王子様フェイスで不自然にニヤニヤ……いや、ニコニコしていた点か。

また食べさせられそうな危険を感じた。

ジュノちゃんは腕組みを解かないまま、目を閉じて説明を聞いていた。え、実は寝てたとかかないよね？

その後はジュノちゃんの、もふもふベッドで眠りについた。

「クン？」

「ロイス？」

「わふ」

「ロイスは女の所かな。あいつは自由人で女好きだからね」

「レイル様もですけどね」

「何か言ったかいユザ？」
「いいえ」

口を挟んできたユザに笑顔で返すレイル。
レイルは基本、爽やかな笑顔を振りまいているが裏が猛烈にあり
そうだ。常に笑顔の人の怖いつて言うじゃん？

「さて、今日は何処に行こうか」

ふむ……。

「城から出ようか」

「わふ！」

「え、ダメですよ！ 今日こそは書類片付けてください！」

「ユザは来たくなかったら来なくていいよ。さあネノ、リニー行こ
う」

「ちよちよちよ……あああもうっ。分かりましたよ！」

いつもユザは止めに入るが結局負ける。

「ですが昼までですよ！」

「分かった分かった」

てつきり変装でもして行くのかと思ったら、特に顔も隠さないま
まユザとリニーだけ引き連れて街へ降りるレイル。
護衛っていっぱい連れてくのかと思ってたんだけどな。

「ふんふん？」

「ん？」

「ふおん？」

「……ごめん、分かんないや」

「わふ」

伝わらなかった。女関係はすぐ伝わるんだけど、護衛の疑問は伝わらなかったらしい。

「何か食べようか」

「わふ」

市場みたいに賑っている所に入ると、レイルに気付いた人達が一気に騒ぎ始める。

元から賑っていた市場がさらにざわめく。

「金髪……レイル様よ……！」

「あ、こっちを向かれたわ！ レイル様……！！！」

「今日はロイス様はいらっしやらないのね？」

「でもユザール様がいるわ！」

いたるところで上がる黄色い歓声。ずいぶんと人気らしい。驚いたのはユザも相当人気があるということ。

「クンクン？」

「ユザは黒騎士団団長だからね。有名だよ」

「ブホ……！」

「なんですかその失礼な視線は……！」

別に疑ってる視線なんて送ってないよ！

ただちよつと、ホントかなー？ってという視線だよ……！！

「フィリール家は代々仕えてるんだ。だからユザも小さい頃から俺達の後ろを着いて来てたんだよ」

「クン？」

「ああフィリールっていうのは、ユザの名字。小さい頃は可愛かったのに、今となっては口うるさくなっちゃって」

「あなた達がサボるからでしょう！ おかげで物心着いた時から苦労してるんですよ！」

「ご苦労様ー。あ、おねーさん、それくれる？ いくら？」

ユザを適当にかわすと、果物を売っている女の人に声をかける。女の人は顔を真っ赤にして手を胸の前でぶんぶん振る。

「ただだ代金なんて滅相もございません！！ どうぞー！！」

「そう？ ありがとう」

美味しそうな桃をもらったレイルは、礼を言うと桃をユザに渡す。

「ネノが食べれるくらいにね」

「分かりました」

再び渡されたそれは、一口サイズに切られていた。

「わふう」

「すごいかい？」

「わふ！」

「ほらあーん」

「わーん」

んんん美味しい！

「わふっ」

「良かったね。リニーも食べなよ」

「ええええ!?! そんなっ」

「わん!」

「ね? 君の主人もそう言ってるし」

主人?.....私か!!

「そ、それでは、失礼します」

パクつと口に含むリニー。

「クン?」

「はい、美味しいです」

「わふう」

「もっと食べる?」

「わふ」

口を開けると放り込まれる桃。うん、美味しい。

「あれ、俺はないんですか?」

「ないよ」

一人貰えないユザは、分かってましたけど.....、と呟く。

その後も食べ歩きをしながら市場を回る。

昼に近くなつた頃、ユザが切り出す。

「そろそろ戻りましょうか」

「えー」

「約束したでしょう」

「グル」

「硬いこと言うなよ。今日はもうちょっと遊んでからにしよう」

「あのね、レイル様とロイス様は毎日十分遊んでるでしょ」
「足りない」

流石双子。言うことがロイスと一緒にだ。

「さ、帰りましょう」

「ネノもまだ帰りたくないよね？」

「わふ！」

「ほら」

「ダメですよ！ 何のための約束ですか」

レイルにユザの隣へ行くように言うと、レイルの腕の中からユザに前足を伸ばし、ポンと手を置く。

「わん……、わふう、グル！」

ふっ……。良い事言った。

「いやあの、全然分からないんですけど」

「ガル！（しまった！）」

自分ではすごい決まったと思ってたのに！！

「記録と規則は破る為にある」って。いいねソレ。今度使おう

「使わないでください！ どこの悪知恵ですか！」

「わふわふ」

学校で誰かが叫んでた気がする。

「さて、どこに食べに行く？ 何食べたい？」

「わん！」

そりゃあ肉でしょう！！

「了解」

結局折れるしかないユザは、溜息を吐きながら着いて来る。

「嫌だった帰ってもいいよ？」

「そんな危ないこと出来ないです」

「大丈夫だよ、この頃平和だし」

「そっちの心配じゃなくて、女性を何人も連れ帰りそうで怖いんです。もしくは突然失踪しそうで」

「ネノがいるからそんなことしないさ。先約のレディがいるのに失礼だろう？」

「……そうですね」

うむ。日々苦勞してそうなユザだった。いや苦勞してるのか。

そこに私も加わったんだから、それはもう厄介だろう。自分で言うのもあれだけどね。

「わふ」

がんばれユザ

「他人事ですね……」

「わふ」

他人事だもん。

小さな発見は得した気分になるよね

超高級料理店にでも行くのかと思ったら、着いたのは市場の近くにある、夫婦が経営する小さな料理店だった。

もちろん犬のご飯なんてものは置いてなかったが、城でも人間食を食べているわけで、そこでもレイルに食べさせてもらいなからハンバーグを平らげた。

チーズがかかって美味しかった、うん満足。

カララン、という鈴の音を立てて店を出ると、再びレイルとユザの攻防が始まる。

「さあ帰りましょう」

「そう言うなよ。食べた後は運動しないと」

「どういった運動をするつもりですか」

ジト目のユザ。

「ん？ 公園が近くにあるし、そりゃボール遊びでしょ」

そんな庶民的な遊びをレイルがするのか。似合わないぞ。という

かボール持つてるのか？

「城の庭で遊んだらいいじゃないですか。ここでそんなことしたら大変なのは分かるでしょう」

「大変なのはユザだけで、俺は別に遊んで楽しんでるだけだから大変じゃない」

「……分かりました。言い方を変えます。俺が大変なので城の庭で遊んでください」

「イヤ」

緩やかな笑顔で、切れ味抜群の刃を瞬時に繰り出すレイル。

ユザの顔が引き攣っている。

「さて行こうか」

「はあ……」

ユザの戦意喪失により、レイルの勝利になったらしい。

まあ、最初から分かっていたことだろう。

市場から少し坂を下りると広々とした公園があった。

「わふう」

日本の公園と同じだ。滑り台やブランコがある。

公園は、遊具がある側と、芝生だけが広がる側に分かれているようだった。

「遊ぼうか」

「わふ」

芝生に降ろされた私はレイルを見上げる。すると、いつの間にかレイルの手には小さなボールが握られていた。

「取っておいで」

「グルルル」

ええええ。リカちゃん人形の次はボールですか。私は何歳だ。いや、その前に人間だよな？あ、今犬か。

「ほら行くよ？」

「ギヤウー」

運動はクライじゃないけど、そんな本格的な犬の遊びは

「ワンツッ！」

面白かった。

ダメだ。ボールを投げられると反射的に体が動く！ 犬か！コレが犬なのか！！

翼をバタバタさせながらボールが投げられるのを待つ。

「ワンワン！！」

最初はブーブー行っていた私だが、今は夢中で追いかけていた。尻尾が止まらないのがわかる。

遠くに投げられたボールをくわえて戻ってくると、子ども達が集まっていた。

「ユザールド様！ 剣を教えてください！！」

「ぼくも！！」

「わたしもお！」

「ずるい！ ボクも！！」

なんだか大人気らしいユザ。

お母様方がレイルに群がり、子どもがユザに群がるという図が出来上がっていた。

ユザとかどうでもいいけど……

「ガルルル（早くボール投げて欲しいんですけど）」

ポツーン、と一人（いや一匹？）ボールをくわえたまま4つ脚で佇む私。翼がシヨゲてきちゃったよ。

そこへリニーが駆け寄って私の前でしゃがむ。

「わふ（良い所に来た。投げて）」

「えっと、お休みになられませんか？」

「わふふ（投げて）」

「ユザールド様とレイル様はもう少しかかるかと思えますし……」

「ガル、ワン！（そっちはどうでもいいよ、投げて！）」

どうも伝わっていないようなので、ボールをリニーの手に押し付ける。

「投げる、のですか？」

「わふっ」

「疲れていませんか？」

「わふ」

「分かりました……」

「ワン！」

よっしゃ来い！力一杯投げてね！！

「行きますよ！」

「ワンワン！！」

「たあっ！」

「うワウ！！？」

「きゃあ！」

可愛らしい掛け声と共に投げられたボールは、逞しい速さで盛大に飛んでいった。

力はあると思っていたけど、ここまで秘めていたのか。いやいや、今は取りに行かないと。

「ネノ様！」

「ワン！（大丈夫！）」

だだだだだー、と走って行ってパクリとくわえるとまたリニー達の元へ走って行く。

しかしリニーの姿が見えたあたりで、突然体に異変を感じた。

「ギャウ！！（これは！！）」

一瞬意識が遠のくと、次の瞬間には視線が上がっていた。

「戻ったああああ！」

「ネノ様！！！」

ガッツポーズと共に空に吼えた私。

……ん？ちよつと待てよ？

服って……………

「着てる！」

「何がです？」

「あああ何でもない！ こっちの話！」

駆け寄って来たりニーが不思議そうに私を見る。

そりゃね、戻ったら裸でした、とか笑えないからね。そうだよね、アニメでもズボンは絶対なくならないしね！

「へえ、これが噂の天使か。確かにロイスが気に入るのもわかるね」

いつの間にやらレイルと愉快的仲間達（ユザ含む）が、私の周りに群がっていた。

来るなら子どもと奥様方を置いてきて欲しかった。

これだけ囲まれると気の弱い（ウソ）私は落ち着かない。レイル達は慣れているのか気にしてないみたいだけど、ダメだ！！

「レイル、ネノ帰る……………」

弱弱しく、か弱い子どもを演じてみた。

「帰りたいの？」

「うん」

「じゃあ帰ろうか」

レイルは優しく微笑むと、スツと両手を差し出してきた。その手に誘われるようにレイルに近づくと、ふわりと抱き上げられる。

……うへへ、最高。やっぱいいね、イケメンは！ テンション上がるね！！

おっと危ない、顔がニヤける所だった。あ、すでにニヤニヤしてたかもしれない。前方に見える少年が怪訝な顔をしている。

レイルの首にギュウと抱きつくくと、甘い香りが広がる。こんなところもロイスと似てる。ジュノちゃんは爽やか系だけ。

「じゃあみんな。またね」

そう言うと、レイルは歩き出す。

後ろから着いてくるリニーとユザを見ていたけど、段々眠くなってきた。

「ネノ？ 眠いなら寝な」

ポンポンと背中を叩かれると、いよいよ眠気のピークが訪れる。

ガンガンギンギン響く音。
何？せっかく心地いいのに……。

「ん……」

重い目を開けてみると、人と人が剣をぶつけあっていた。

「……ええ!？」

「あ、ネノ。起きちゃった？」

「レイル……」

「ごめんね、うるさかったかな。ここは訓練場だよ。……おいジ
ユノア!！」

レイルは私を抱き上げると、兵士達に近づいて行く。

稽古をつけていたジュノちゃんは、剣を出したままこちらを向く。

「ああ起きたのか。ネノ、体に違和感はないか？」

チラリと、視線が剣へ動く。本物だよ。びっくりだよ。間近では
ぶつかり合う音が鳴り響く。

「おい!！」

「つうえ!？」

あ、私じゃないのか。どうやら兵士達に向けた声だったらしいが、
いきなり大声を出すから変な声が出てしまった。恥ずかしい!

「剣を下げる!！」

訓練中の兵士達は驚いたように一斉にジユノちゃんを見る。

「聞こえないか!!!」

しかし再び、剣を納めたジユノちゃんの声が響くと、皆急いで剣を仕舞った。

「全員魔術へ入れ!!」

「「「はっ」「」」

ジユノちゃんの声に応える兵士達。
何故かレイルは笑っている。

「それでネノ、異常はないか？」

「あ、うん! ないよ!」

ジユノちゃんの質問に、今度はちゃんと答えると、ぴよんと抱き
付く。

「ジユノちゃん!! 戻ったよ!!」

ふと蘇った嬉しさに翼を広げてそう言つと、兵士がさっきとは比
べ物にならない驚き顔で、一斉にこつちを向いた。ユザは額に手を
当ててるし、レイルに至っては爆笑している。

……あれ、なんか変なこと言つた?

気分はプリンセス

どうしたんだろうか。みんな驚きの表情から恐怖の表情へ変わっていき気がするんだけども。

段々張り詰めていく空気を気にせずジュノちゃんが私は抱き直す。うん、ベストフィット。

「良かったな」

一言そう言うと、さっきまで剣を持っていた手で私の頭を撫でる。レイルもロイスもジュノちゃんもよく撫でるなあ。いいんだけど。

また兵士達を見ると、今度は呆気に取られた表情に変わっていた。みなさん表情豊かだね。揃ってるし。流石兵士。

「今日はどこに行っただ？」

ジュノちゃんが聞いてくると、しゃべれるようになった喜びを思い出して翼が目一杯開いたのがわかった。

「あのねジュノちゃん！音乃ね、レイルとボール遊びしたの！でねえレイルに人いっぱい寄ってきて音乃ポツーンだったの！でもねりーが来てボール投げしてくれたの！そしたらね！とおーくまで飛んでったのお！！」

子どもらしいテンションで弾けてみた。翼もバサバサ弾けてみた。完璧だ。どうだジユノちゃん。

「そうか」

良くも悪くもクールだぜジユノちゃん！！

あれだけ熱く語ったのに「そうか」だとう！？……ん？でも心なしか目が据わっている。視線の先にはレイル。

「ははっ、悪かったよジユノア。ネノを放っておいたわけじゃないよ。気配はずっと辿ってたさ」

超イケメン王子は、フワフワの金髪を揺らしながらこちらに歩いてくる。

そういえばさっきレイルを呼び捨てにしたけど良かっただろうか。まあ問題ないか。レイルは気にしないだろう。

「護衛は付けたのか」

「ユザを連れて行った。」

ああ、言いたいことは分かってるよ。だがぞろぞろと連れて歩くのは好きじゃないんだ。さあネノ、中へ入ろうか」

話題を変えるようにレイルが手を伸ばしてくる。

ジユノちゃんが無言で私を差し出すと、今度はレイルの腕の中に納まった。

「ジユノちゃんまた来てもいい？」

「……ああ」

少し間はあるが気にしない！ 案外臭くなかったし暇だったらまた来よう。

ジュノちゃんの部屋へ戻ると、毎日の日課のようにくつろぎ始める。

何故かジュノちゃんの部屋が溜まり場らしい。いつの間にか帰っていたロイスもお茶を飲みながら私の熱弁を聞いている。

何を王子二人とリニーともう一人に熱弁してるかって？それは……

「でね！音乃はね！ピンチになるとヒミツの力が解放されるの！」

私の中二病の設定である。

「悪い人が襲ってきてても、ドラゴンが現れて音乃を守るの！音乃の家来だよ！」

「王子様が現れるんじゃないのか？」

バリバリとお菓子を食べながら、気だるそうに聞いてくるロイス。そんなロイスとは対照的に熱くなる私はソファに立って翼を広げながら力説した。

「違うよ！王子様はもつと後だよ！全部使い果たして、もうダメってなった時に現れるの！！待たせたなって！！！！キヤー！！」

「王子様なのに、待たせたなって言っの？」

ふーん、と興味無さそうに呟くロイスとは違い、レイルは相変わらずの笑みで話を聞いてくれていた。

「カツコイイ王子様なの!!」

「じゃあ、ネノが危なくなったらそう言って現れるよ」

ぐはあっ!!

甘い笑顔でサラリと放たれる言葉はものすごい威力だった。

思わず顔を赤くしたら、ロイスがこちらをチラ見して喉で笑った。くっ……流し目も中々の威力だぜ。この二人といたら寿命が縮まりそうだ。

「ネノの秘密の力はなんなの？」

「それはね!」

言おうとしたがやっぱりやめた。

「……今度教えてあげる!!」

「今は教えてくれないの？」

「うん!!」

ヤバイ。楽しい。イケメンが優しく相手してくれらって最高だ。

レイルは聞き上手だしロイスもなんだかんだで聞いてくれてるし、視界の端では聖母みたいに柔らかく微笑むリニーが見える。

視界に入ってるけど意識には入らない人もいるけど。(ユザ)

「教えてくれるのを楽しみしてるよ。さあそろそろ座りな。こっちへおいで」

「うん！」

レイルに手招きされて、隣へちょこんと座る。

「よくしゃべったから疲れただろう？ 何か飲む？」
「飲む！」

一旦落ち着いたら急に喉が渴いてきた。
確かによくしゃべった。どれくらいかって、えーと体内計算で1時間半ぐらい。合ってるかは知らない。

レイルからミルクを受け取ると一気に飲み干した。

「ぶはー！」
「上手かったか？」
「うん！」

ロイスが頬杖を付きながら聞いてくる。

私の答えを聞いて、良かったな と微笑した。

ロイスってレイルとは違う不思議さがある気がする。……んまい
つか！！

「ロイスも飲む？」

「俺はコーヒー。ミルクはお子ちゃまの飲むもんだ」

むむむっ。

「子どもじゃないもん！」

ソファから降りて鼻息を荒くしながら言い返す。

「くく、そうだな。じゃあ俺はいいからユザにミルクやれ」

「ユザはやだよ！」

「なんでだ？」

なんで？

「……超イケメンじゃないから!!」

ユザが溜息を吐いたのが聞こえた。

「なんで俺って報われないんでしょう。苦労してるのに……」

「人生ってそんなもんだよ！」

「小ちやいのに分かってんじゃねえか」

「ネノ小さくないよ！」

「そうだったな。悪かった」

そう言ってロイスはお菓子を差し出してきた。

しっかりお菓子を掴むと、再びソファに座って口に頬張る。

ガチャリという音がすると、扉が開いてジユノちゃんが入ってきた。

「おかえり!!」

「ああ」

口の中に詰めたままジユノちゃんに飛び付く。
上に手を伸ばすと、要求通り抱き上げられた。

「疲れた？ ネノ重い？」

「いや大丈夫だ」

ジュノちゃんが少し微笑んだ、気がする。ジュノちゃんって基本無表情なんだと思ってたけど、小さく変化しているらしい。

今度じっくり観察しよう。

私をレイルの隣に降ろすと、ジュノちゃんは向かいのロイスがいるソファに座った。

「あの後どうしたんだい？」

レイルがジュノちゃんに聞く。

「魔術に切り替えた」

「そうじゃないよ。色々聞かれたんだろう？」

「……ああ。保護していると言っておいた」

「そうか。みんな驚いてたね。特に名前に」

レイルがそう言うと、勘付いたらしいロイスが口を挟む。

「なんだ、見せに行ったのか？」

「見せに行ったわけじゃないよ。少し用事があったからついでにね」

「レイルも聞いたのは初めてだったよな。驚いただろ」

「ああ笑ったよ。まさかジュノアを、ちゃん付けで呼ぶ子が出てくるなんて。ロイスが言っていた意味が分かったよ」

なるほど、私か！

「ジュノちゃんって呼んじゃダメなの？」

「ん？ だめじゃないよ。ジュノアが良いって言うのなら」

笑いを堪えているレイルとロイスはジュノちゃんを見る。

私もジュノちゃんを見ると、ジュノちゃんの視線が外へ動いた。

「……別にいい」

その瞬間堪えられなくなったらしい二人が同時に吹き出す。ついでにユザの咳払いも聞こえた。

ジュノちゃんの目が鋭くなった気がした。

よく分からないが楽しそうだなによりだ。

気分はプリンス（後書き）

仕事で疲れてくると私の中二病が発動しそうになります

目の保養が欲しい今日この頃。

また新連載を始めちゃいそうで困っちゃってる今日この頃。

駄々は「ねるモノ」

体が無事に戻った翌朝（いや戻ったけど、戻ってはいんだけどね？）、珍しく三兄弟がジユノちゃん部屋の揃っていた。しかも正装。

「ぐぶっ」

鼻血出るぐらい双子様がカッコイイのはどうしたらいいだろう。そして弟様が熟練の護衛兵に見えてしまうのはどうしたらいいだろう。

ついでにオマケ（ユザ）すらもカッコ良く見えてしまうのはどうゆうことだろう。

「……大丈夫？」

「なんでもありません。大丈夫ですハイ」

「そう……」

すごく心配そうな目で見てきたレイル。

「今日は何があるの？」

「ああ。父上と母上に会うのさ。というか、ネノを披露しに行くんだけどね」

「え！？」

ええええ？

「私？」

「そう。母上が見せろってうるさいんだ。悪いけど会ってくれる？」

いやいや、会ってくれる？って、拒否権ないんですよね！？

いいけどね！だって超イケメン王子のお父様でしょ！っていうことは絶対カツコイイ！！

そこらへんのオツサン臭いのは違って、高級感溢れるオジサマなハズ！

「ふふふ……」

「ねえ、大丈夫？」

「大丈夫！」

何の問題もないよ！

あ、でもちよつと緊張してきた。

「あー……」

ん？ 気の抜けた声の方を向くと、そこには王子様フェイスでヤル気が皆無のロイス。

「行きたくねえ」

真面目な顔でしみじみと呟かれた言葉が、どれほど行きたくないかを示していた。

「それは俺もだよ。まあ一番はジュノアだろうけどね。ね、ジュノ

ア？」

え、ジュノちゃん？

「……ああ」

私が見ると視線を逸らされてしまった。

「……急用、思い出した」

いきなり棒読みでしゃべり出したジュノちゃん。

「だから行けない。夜には帰る」

そう言って早足で出て行くこととするジュノちゃんをガッチリと止めたのはユザだった。

「許しませんよジュノア様」

ジュノちゃんの無言の強烈な睨みにも、今日のユザは負けなかった。

「離せ」

「だ・め・で・す！！　ちゃんと出てください！」

「……いやだ」

小さな声だったが、確かに聞こえた。「いやだ」だって。ジュノちゃんが駄々こねてる！？

「まったく、いつもいつも苦勞させないでください！！！」

「仕方がないよユザ。ジュノアの唯一の天敵なんだから」

天敵？

その意味は、お母様にお会いした瞬間に分かった。

私も服装を整えて、ユザを先頭にレイル、ロイス、ジュノちゃん
の後に続く。

扉が開き、中へ進んで行くと勢い良く駆けしてきた美女。まさにレ
イルとロイスの母親という顔だ。この女性が王妃だろう。
しかしその女性は双子の美形に目もくれず、真っ先に抱きついた
のが……

「あんなあ、わたくしのジュノア！ また可愛くなつてえ」
「……」

ジュノちゃんだった。

流石の私も固まった。

可愛い……？ 可愛いってなんだっけ？
チンパンジーまでが可愛くてゴリラとオラウータンはアウトだと
思ってたんだけど、ここでは違うのだろうか。

「ネノ行くよ」

「えっ、あ、うん」

レイルに肩を抱き寄せられて前に促される。
相変わらず、美女は野じゅ……ゴホンッ。失礼、ジュノちゃんに
抱きついたままだ。

前に行くロイスがある場所で立ち止まる。視線を動かすと、豪華
な椅子が見えた。玉座だ。

レイルに促されるままロイスの隣へ立ち止まる。

ドクリドクリと胸が高鳴る。

きつと、王様は素晴らしいオジサマフェイスだろう。

足元から視線をゆっくりと上げる。

「ぎゅえっ」

……私から発せられた、不思議な声の響きに4人の間に暫しの沈
黙が落ちる。

あれだ。王様があまりにも期待ハズレ過ぎて「げっ」って言うて
しまいそうなのを咄嗟に我慢したら、ああいう響きになったんだ。
仕方ない。私は悪くない。王様の顔が悪い。

「……この娘がネノか。異世界の者だと聞いているが？」

短いけれど重い沈黙を破ったのは王様だった。

「はい。ですが、危害を加えることはありません」

そうそう。むしろ加えられてるような気がする。

「ふむ。ここでは落ち着かんだろう。奥へ」

そう言っつてジユノちゃんとお母様を置いて、4人で玉座の後ろにある扉を進む。

「ほー。綺麗な翼だな」

一つのテーブルを4人で囲み、正面の王様が私の翼を見ながら言う。

「広げられるか？」

コクツと頷くと、横のロイスに当たらないようフアサリと広げる。

「ふむふむ」

なんて言いながら腕を伸ばして触ろうとするから、思わずバサリと閉じた。

「……」
「……」

超イケメン以外は触らせないよ!!!

「……まあ、いい。それでだ、どちらが王になるんだ？」
「レイル」「ロイス」

王が聞いた瞬間、それはもう息ピッタリにお互いがお互いの名前を呼んだ。

「おまえらなあ、そろそろ決めろ」

「俺はならない」

「俺も嫌だよ」

王様とロイスはうんざりした顔で話を進める。レイルはいつもの笑顔だ。

恐らく、ロイスが嫌がっていたのはこの時間だろう。ジュノちゃん嫌がっていたのはお母様？

「ジュノアに任せたらいいだろ」

「アイツは国の砦だ。二つは流石に重いだろっ」

「大丈夫だよジュノアなら。国が危なくなったら俺達も参戦するし」

「どこに王子三人が揃って戦争に赴く国がある？」

「ラニツ^{ニツ}シュ国」

「はあ……。お前達とは話がしたくない。この時間が憂鬱だ」

「俺も」

三人が話をしている最中私はずっと王様の顔を見ていた。

だって余りにも残念過ぎるんだもん。しかしジュノちゃんは誰似なんだろう？突然変異？

母親は超美人、父親は超平凡。冠がなかったらそこらへんのサラリーマンと区別がつかないぐらい。

腕を組んで首をかしげていたら王様と目が合った。

「さつきから見ているが、私の顔に何かついていないか？」
「いえごく普通の顔が」

「……」
「……」

しまった！！
つい本心がチラリ。

「……と、特に特別な意味はないデス」

「……そうか。別に聞いていないが」

なんか墓穴掘った！！！？

「中々珍しいのを拾ったな」

「そりゃジュノアを手懐けるくらいだからな」

手懐ける？

「なるほど」

「あ、こういうのどう？」

何か閃いた顔のレイル。

「ネノを神の子に仕立てて女王にする。護衛はジュノア」

「よしそれで行こう」

すぐさま賛成したのは勿論ロイス。

「何をほざいてる。最高魔法が使えれば最終案として考えるが、読

めもしないであろうこの子には到底無理だ」

最高魔法……

「それって図書館の奥の部屋にあった本のこと？」

そう言ったら、三人が一斉に見た。

「読めるのか？」

「え、はい」

「その前に、部屋に入れたのか？」

「うん」

「いつだ？」

「ロイスに飴貰った次の日。あの部屋の窓を覗いてたら落ちた」

「ああ、だから森に居たの」

「うん」

「……父上、この子は本当に神子かもしれない」

なんと、神の子説浮上みたいです。

中二病にも色々ある

「……レイル、私は騙されないぞ?」

何が?

「バレました?」

「当たり前だ。何年お前達の父親をやっていると思ってるんだ。その子は神の子でもないし、次期王を押し付けようというのもバレバレだ」

ほお……。

「バレたら仕方ない。でも本当にあの本を読めるのはすごいよ」

「ああ。すごいというか、おかしいというか……」

「音乃おかしいの?」

「いやネノはかわいいよ。少し変わってるけどね」

ナイスフォローだレイル。

「今度魔法を使わせてみる。もしかすると、もしかするかもしれないな

い」

「ええ」

「もし使えたら……、本当に王にしようか」
「ロイス。まだ言ってるのか」

呆れ顔の王様。

「レイルも思ってたんだろ？」

「ふふ」

「バカ息子どもが……」

「いいじゃねえか。俺達は女のために生きてんだ。国民のためじゃない」

うむ。キリツとした顔で言い切ったよロイス。

「ネノを神の子じゃなくて妹にしようか。それなら魔法を使えても自然だ」

「そうだな。翼は神のお告げか、良いように噂を広めればいい」

「ちよつと待て。なんでお前達は勝手に話を進めているんだ」

「王になるのが嫌だから」

うむ。パパは大変だ。

「……もういい。この話は今日は終わりだ。そろそろジュノアを助けてやれ」

「放っておいたってそのうち来るだろ」

ロイスの言った通り数分後、珍しく必死の形相のジュノちゃんが左腕にお母様を纏わりつかせて入ってきた。

「あら、わたくしとしたことが余りの感動に聞くのを忘れてたわ！
ジュノア！ 怪我はないの？ お腹痛くない？ アザは？ ご飯

はちゃんと食べてる？ 夜に寂しくて泣いてない？ お兄ちゃんに
いじめられてない？」

お、おうおう。これはジュノちゃんじゃなくても1歩2歩140
歩ぐらい引いちゃうぜ。落ち着いてお母様。

「……………ダイジョウブデス」

すごく困ったようにカタコトで答えるジュノちゃん。

「そう？ ホントに？ 何か困ったことがあったらすぐにママに言
うのよ？ 分かった？」

「……………ハイ」

お母様、ジュノちゃんはきっとあなた様が一番の悩みの種だと思
います。

「ん？」

そこでこちらを見てなにか気づいた様子のお母様。

「あら。あらあらあら！ この方！？ この方なのね！？」

もしかしくても私を指してる？ え、もしかして「よくもわたく
しのジュノアを！」とか言われちゃう？ 違うんですお母様、私は
無実です。

「まあ可愛い！ ジュノアにも負けないわ！！ お名前は？あ！ネ
ノさんって言ったかしらね？ ね？そう？」

「は、はい」

がしつと手を握られて近距離で、興味津々のキラキラした大きな瞳が私を映す。そこに映った私は猛獣に食べられそうな弱い獣に見えた。

「そうよね!! ああなんて可愛いんでしょう! 一度お会いしたかったのよ!」

「ワタ、ワタチモデス」

興奮しきったお母様を前にして、ジユノちゃんのようにカタコトになる私。しかも噛んで私がワタチになったがお母様は全く気にしない。いやきつと気付いていない。

「そう? そうよね! そうよね!! 気が合っわね〜!」

「母上、ネノが困ってる。少し落ち着いてください」

おうロイス! ナイスだ!

「あらそうよね! あ! やだわ、わたくしっしたら自己紹介がまだだったわね!」

ロイスさん、全然落ち着かれてないんですが。

「フローナ・サリス・ラニッシュよ。フローナと呼んでね!」

「あ、はい、いいえ」

ダメだパニックになってきた。誰かこのお母様を止めて! ていつか手を離して! 手汗でベタベタなのになんで離さないのこの人!?

「フローナ……。いい加減こちらに来て」

よしがんばれサラリーマン王！

「あらあらパパ！ なあに？ ヤキモチ？」

「いいから来い」

「分かったわ」

そう言つて立ち上がるお母様。……ん？ な・ん・で 手を繋いだまま？ 翼を広げてささやかな抵抗を試みるが興奮状態のお母様には気付いてももらえなかった。

「さあ行きましようネノさん」

ええええええ。

「可愛いジュノア。あなたもおいで」

ええええええ！

「ネノさんはこちらよ。ジュノアはこっちね」

言う通りに座らされたが、何故かサラリーマン王の隣は私だった。リーマン王・私・お母様・ジュノちゃん。私の前にロイス、その横にレイルという図である。

何故3・3で座らないんだとか、リーマン王に誘われたのはお母様なのになんで私が横なんだとか、そんなことは聞いちゃいけない。いや聞けない。

「両手に華ね！ 嬉しいわあ！」

いやいやいや、華？ まあいい、感覚は人それぞれ違うところ。こう。

とりあえず私は、右手にバラ、左手に雑草気分だ。

バラはもちろんお母様。美しいがトゲというか余分なもんが付いてるからね。雑草はリーマン王。王に向かって失礼って？ 声に出さなければ失礼じゃないよ！

「わたくしネノさんにお聞きしたいことがたくさんあるの！」

「ド、ドウゾ」

「女性に聞くのは失礼なんだけど、好奇心には勝てないわ！ ネノさんはおいくつでいらっしやるの？」

「じゅうはっさ……じゅっさいデス」

危ない危ない。18歳じゃなかった。

「まだ10歳なのね！ ということはあと6年待てばいいのね！ 楽しみだわあ」

何がでしょうか？ なんか嫌な予感が……。

「6年後にはネノさんはわたくしの娘になるのよ！ ふふ、誰のお嫁さんかしらねえ。ふふふふ」

怖い。怖いよママン！ なんかもう結婚が決定事項だよ！ いいけどね！ 双子だったら！

「随分ネノを気に入られたのですね」

レイルがいつもとはちょっと違う、少し妖しげな笑みで言う。

「もちろんよ！ わたくし、ジュノアやネノさんみたいな可愛いものには目がないの！」

うむ、この人の感覚は一生分かりそうにない。

「ところで、ネノさんの翼は何故生えているのかしら？」

「ワカリマセン」

「そう。ネノさんは違う世界から来たんですって？」

「ハイ」

「お話を聞いてもいいかしら？」

「ハイ」

「ご家族は何人いらしたの？」

「父と母とバカな弟の三人デス」

「あらあら弟さんがいたのね？ ネノさんみたいに可愛かったのかしら？」

小さい頃はよく似ていると言われたな。成長してくると私は失敗顔で千歳ちとせは成功顔とか言われたが。しかしどちらも中二病に変わりはない。

「そうですね、中二病ですが」

「あら大変！ ご病気なの？ 大丈夫なのかしら？」

しまった。面倒くさいことになった。

「うーんと……ダイジョウブです」

説明しようと思ったがやめた。

しかしお母様は逃がさない。

「どういった病気でいらっしやるの？ その、ツーニビョウウというのは？」

違います、中二病です。

「えっと……まあその、脳内でビームとか撃てたりしちゃいます」

ダメだ。なんだこの説明は。でも本当なんだ！ 千歳も私も中二病の邪気眼系なんだ！！

あの頃はよく千歳と語り合ったもんだ。自分にはこんな能力があつてあんなことが出来てこんなんだ……

「そして秘密の力が隠されてるんだあああああ！」

はっ！！ 久々に思い出して思わず叫んでしまった！

目の前には明らかに引いた目のロイスと、心なしか苦笑いのレイル。横のリーマン王は突然の叫びに驚いたのか、頬に付いていた手がズレていた。

しかしお母様は強かった。流石ジュノちゃんの母親だった。

「まあ素敵！ ツーニビョウウというのは病気ではなく職業なのね！」

違います、色々違います。どうやったら今の説明でそうなるんですか。でも面倒だからそれでいいです。

「ネノさんのお話は面白いわ！ もっと聞かせてちょうだい！」

と、言われたからレイルとロイスにした私の中二病設定を語って

おいた。

最終的にすごく仲良くなった気がする。レイルとロイスは寝ていたが。

中二病にも色々ある(後書き)

今度連載予定のものを、試しに短編でUPしました！
よろしければ読んでみてください。

恋の前触れ！？（前編）

それはある日の昼の光景

ジュノちゃんの部屋のソファに座って皆を待っていた時、ガチャ
リと扉が開き……

「おまえ誰だ」

扉を閉めたロイスからこの一言。地を這うような低い声。なんで
ロイスからそんなこと聞かれなきゃいけないんだ？

朝（と言っても昼前）の日課となった「ジュノちゃん家（部屋だ
けど）集会」をしに一番乗りで訪れたただけど……

ロイス、記憶でもおかしくなっただらろうか。

「何か言え。それとも何も言わず死ぬか？」

スツと空中に出てきた剣。

「わお！」

「あゝ？」

しまった、緊迫した空気だというのに、感嘆の声が漏れてしまっ
た。

だっていきなり剣が現れるんだよ！？ びっくりするじゃん！
心の声に反応したのか翼がバツサリと広がる。

「お前……」

お？ 思い出した？ そのままバサバサと動かしてみる。

「ネノの親戚か？」

「は？」

萎えた。今ものつすごく翼が萎えた。

「誰かー早く来てーロイスがおかしーです」

「俺の名前知ってんのか」

「ちよつとロイス本当に大丈夫？ 私だよ？ 音乃だよ？ 覚えてないの？」

「あ？ お前がネノなわけねえだろ」

「は？ じゃ誰が音乃さ！」

「誰が……って、もっと小さくて可愛くてもうちよつと痩せててからかい甲斐のあるのがネノだろ」

うん、落ち着こう。色々ツッコむ所はあるだろうけど落ち着こう。

もっと小さい？ 一夜にして私成長したのか？

「うん？」

あれ、そういえば、視線が高いような……。

「でええ！！？」

ある可能性に気付いて自分の体をベタベタ触る。鏡で見たら早いんだけどね！

「む、胸が大きくなってる！」

「いやそんなにデカくないけどな」

「黙れ！！」

ウツソ！ ホントに成長した！？ なんで？なんで！？

しかもロイスが分からないくらいの急成長？

「えっ、まさか……………戻った…………？」

「何がだ？」

「いえなにも」

多分そうだ。でもこれはまずいかもしれない。

なんでつてロイスが分からないんじゃないじゃきつとレイルも分からない。犬になった時は殺されなかったし捕まえられなかったけど今は人間だ。

あつ、でも。

「ジュノちゃんならわかるかも…………」

「おい、お前何だ。ジュノアの女か？ アイツをそんな呼び方する奴がまだいたとはな」

「だから音乃だって！ 鈍感ロイス！！」

「死ぬか」

「いえすいません」

それからああだこうだと言い合いをするがロイスは攻撃してくる様子も、私を音乃だと信じる様子もない。

「はあ…………話が進まねえ。いい加減吐け」

「だから音乃だって」

「じゃあ仮にお前がネノだとして、何故突然可愛くなくなつて……ゴホンッ。デカくなった？」
「……………」

アイツちよつと殴ってきていいだろうか。え？いいよね？ね？
女の子に向かって可愛くない？ ひどくない？え？ひどいよね？
沸々と沸いてくる怒りに震えてきたとき、ガチャリとドアが開いた。

「やあロイス。……と、ネノの親戚？」

流石双子。思考回路も似てるのか。

「違います。音乃です」

「はは、まさか」

何その爽やかな笑顔でその笑い。
口には出さないだけで、やっぱりレイルもロイスと同じこと思っ
たな。

あと今気付いたが、私の翼を見て、兄弟や親と聞かないで親戚と
聞いたのは血が近かったらもつと可愛いと思ってるせいかな。

自分達の顔が良いからって世間なめてるよこの双子。

しかしなんでいきなり戻ったんだらうか？

「うーん……………」

怪しいものでも食べ……………あああ！！

ロイスじゃん！

「やっぱりロイスのせいじゃん!!」

「あ?」

「昨日例の飴食べさせたでしょ! 絶対それだ!」

そうだ。昨日寝る前に皆でジュノちゃんの部屋にいて、夜食とか言っけてロイスが色々持ってきた中にちゃっかりアレが入ってたんだ。ちやっかりね。

ルンルンだった私は、怪しい飴のことなんて忘れて食べた。その後自分の部屋に戻ってすぐに寝たから、寝てる間に飴の効力が働いたんだろう。

「……あ。おおっ。……いや待て、ということは本当にネノか?」

「そうだよ!」

「ウソだろ……」

「どこらへんが!」

「そりゃあ……」

「やっぱり言わなくてもいい! なんとなく分かった!! ていうか絶対分かった。自分でも自覚あるから言っちな!」

どうせ可愛くないとか言うんだロイスは! レイルは微笑んでるだけだね! でもちよっとガツカリしてるような感じあるよ! ひしひしと伝わってくるよ!

「まあ、とりあえず座ろっせ」

うむ。

「仮におまえがネノとして、寝てる間にデカくなったとしよう」

「うん」

またか仮か。仮についてなんだ。まだ信じてないのか。

「自分の部屋からジュノアの部屋に来るまでに違和感はなかったのか？」

「うーん、寝ぼけてたし覚えてない」

それに前まではあの視線だったわけで、寝起きなら尚更気にしなかった。

実際、ロイスに指摘されるまで気付かなかったわけだし。

「そうか」

「彼女がジュノアの部屋に来るまでに、兵士がいたはずだよ。彼らは何故止めなかったのかな？」

それまで黙って座っていたレイルが口を開く。

「それも問題だな。聞いてくるか」

スツと立ち上がって扉を開けるロイス。

「おい。聞きたいことがある」

「はっ」

「アイツがジュノアの部屋に入って行くのを見たよな？」

私を指差すロイス。

「はい！」

「何故止めなかった？」

「はっ。それはですね、ジュノア様から、白い翼を持つ者であれば

通せ」と仰せつかってしまして……」

「なるほど。ああ、そうか。前に獣になった時も翼だけは同じだったからか。アレは珍しい翼だしな」

パタンと扉を閉めるとソファに戻ってくるロイス。

「……信じるしかないのか」

「何その嫌そうな顔。失礼」

「これが俺の顔だ。失礼な」

「ふふ、いいコンビだよ。」

呼んで来ようかと思っただけどもつすぐ帰ってくるだろうし、ここで待とうか」

ジュノちゃんのことだろう。あとユザ。昼食を食べるために訓練から一旦戻ってくるのだ。

ジュノちゃんならきつとわかってくれるだろう。でもジュノちゃんも落胆した顔をするのだろうか。ちょっと心配だ。

言った方がいいのかな？ ホントは18歳のじょしこーせーです！って。うーん、悩み所だ。

恋の前触れ！？（前編）（後書き）

え？ 服はどうなったって？ そりゃ服も大きくなる仕様です！

（キリッ）

ご都合主義です！（キリッ）

恋の前触れ！？（中編）

ドキドキドキドキドキドキドキ……

ジユノちゃんが私を見つめて数分。そろそろドキドキも面倒くさくなってきた頃、やっと彼は口を開いた。

「ああ、ネノか」

うん、そうなんだけど。
数分間見つめてそれか。それだけか。いや、わかってくれて嬉し
いけども。流石ジユノちゃんだけども。それだけか。

「ジユノちゃん、それだけ……？」

すると一言。

「……大きくなっただな」

うん、そうなんだけど。

どこの近所のオッサンだよ。

「なんだジュノア、コイツやっぱりネノなのか？」

「だからそう言ってるじゃん！」

「面影がある」

「どこらへんにだ？」

「全体的に。……………可愛らしさが残っている」

「くはっ」「ぶっ」

思わずジュノちゃんを見たが、その後に聞こえた音に振り返ると、冷静なレイルがコーヒーを吹き出して若干焦っているように見える。ロイスは笑いを堪えてるが抑え切れていない。ユザだって俯いて耐えてるようだ。肩は震えている。どいつもこいつも失礼な奴らだ。

「おまつ……………ふはっ。……………いや失礼、お前からそんな言葉が聞けるとは思わなかった」

「俺達の教えの賜物かな」

いつもの笑顔に戻ったレイルが平然と言う。
ナニを教えているんだ。

「で、これもあの飴の効力としたら数日で戻るわけか」
「いやあ、どうなんだろう……………」

もしかしたら、飴関係なしに単に戻っただけじゃないかとも思うのだ。

「思い当たる節が他にあるのか？」

ど、どうしよう。言う？ 言うちゃう！？

「何か隠してんのか」

少し低くなるロイスの声。ちよつとこ・わ・い　なんつって。
もういいや！　言つちやえ！！

「えつと……………ホントは元の世界では18歳でっス　エヘッ」
「可愛くねえ」

ボソツとロイスが呟いた。ばつちり聞こえてるよそこの君。

「で？　本当なのか？」

「そーだよ！　何か知らないけどトリップしたら小さくなって翼生
えてたんだよ！」

「へえ」

「興味なし!？」

「いや？　どーりで幼い割に時々言動が変態じみてると思った」
「否定は出来ない」

自慢じゃないが自覚はある！

それからジユノちゃんに黙っていたことを謝っておいた。

「……………別にいい」

つていうジユノちゃんらしい答えだった。
レイルはいつもの笑みのままだった。

一旦騒動(?)が落ち着くとジユノちゃんとユザは訓練に向かった。

リニーはもう少ししたら来るらしい。

あ、そういえば、リニーと言えばこのごろ……

「ねえねえ、リニーってさ、なんかよくユザを目で追ってない？」

「あ？」

「だからあ、もしかして……リニーってユザの事好きなのかな!？」

「今更それを言うのか？」

「ふふ、前からだよ」

二人はそう切り返してきた。

え、気付いてたの？

「お前ニブイな。恋愛したことないのか？」

「あるよ!」

失ツ礼な!

「漆黒のクラウディ様とか、霸王エルメディス様とか、皇帝ルディゼル様に、微笑みの貴公子ロイド様、腹黒王子ヴァンス様、それに

……」

「あああ、もういいもういい。それで？ 叶った恋は？」

「もちろん全部だよ!」

「……は？ お前の世界は皇帝やら霸王やら王子らと気軽に恋愛するの？」

「中々自由な世界だね」

「うん？ ああ、違うよ! これは……言いたくないけど二次元に生きてる人達との恋だよ!」

「二次元……」

「そう！ ゲームの中に存在してるの！！ 皆イケメン過ぎて、考
えるのも辛くて眠れない夜が続くよ！」

「つまり……現実に存在しないのか？」

「だあかあらあ！ 二次元に存在するの！！！」

「……そうか」

すごい可哀想な子を見る目でロイスとレイルが見てくる。なんだ
ろうこの感じ。なんかものすごく悔しいぞ。

「で、結局ネノは現実で恋愛したことないんだな？」

「ううっ。だって、だってしょうがないじゃん！！ 皆カツコ良過
ぎるんだもん！！」

色んな苦難の壁は乗り越えられても、二次元の壁だけはどうが
んばっても乗り越えられないんだもん！！！」

くう、心に響くぜ。

「苦難の壁は乗り越えてきたのか？」

「ていうか、うん、まあ。越えられない壁は横から抜けてくるか、
穴開けてくぐり抜けて来た感じかな。……でも、でもね！」

「あ、ああ」

「二次元の壁だけは、穴開けたら画面壊れるだけだし、横からすり
抜けても見えるのは背面だけだし、画面の中に入ろうとしても一枚
の薄く……でも何よりも厚い液晶に阻まれるし！！！」

「お、おう……」

「二次元だけは、越えられないの……」

「そうか……。いや、その、悪かった」

バツの悪そうに頭を掻くロイス。どうやら熱意は伝わったらしい。

そこへレイルが歩いてきて私の正面で止まる。
そしてゆっくりと引き寄せられて……って、

「うええ!?!」

「ふふ。ねえネノ?」

「ははははいナンデシヨウ」

小さい時は抱っこされたって頭撫でられたってなんとも思わなかったが、今は異常に鼓動が早い。やっぱりリアルイケメンは違う。

「俺よりそのゲームの人達のがカツコイイかい?」

「ええっと、えっと、ドウナンデシヨウ」

さりげなく、さりげなく手が腰に回ってきて更に密着し、もう心臓がバツクバクだ。

「叶わない恋に涙を流すなら、叶う恋に喜びの涙を流してみない?」

「ははははははいつ。……………でえ!?!?」

え? ちょ、え? え?なにこれ。何フラグ? え?は?ええ?

コレ、これ告白う!?!?

「なんだレイル。趣向変わったのか」

パニックり過ぎて、ロイスのそんな言葉は聞こえていない。

「うん? ふふ、可愛いじゃない。ロイスだってちょっと思ってるでしょ? 双子だもんね」

「ふんつ。珍しいから面白がってるだけだ」

「そう?」

「とりあえず今はその辺にしといた方がいいんじゃないか？ 爆発しそうな程赤いぞ」
「そうだね」

シヨート寸前のネノを解放すると、離れ際に髪にキスをした。

「レレレレイルっ」

「なあにネノ？」

甘い。笑みがものっそ甘いッ！ ナニコレ！？ 恋人仕様！！？
そりゃ世の中の女全員落ちるよ！！

「チッ」

レイルの笑みに見惚れていると真後ろで舌打ちが聞こえ振り返ると……

「……タコみたいだな」

雰囲気ぶち壊しだよ！！ なんだ！？ なんなんだ！ 敵か！ コイツは敵なのか！！

恋の前触れ！？（中編）（後書き）

あれなんか恋愛模様？

ええーと、ゲームの名前であんな感じでよかったです？

違ったら苦情ください（

恋の前触れ！？（後編）

「ていうかりニーってジユノちゃんが好きなんじゃなかったの？」

「ああ？ あいつは前からユザが好きだぞ」

「前から？」

ロイスと向き合って話していると、後ろから髪を触られる。

誰かは予想が付いて目だけ動かす。

「俺達が城を抜け出してジユノアの別荘へ行くとユザも来るんだよ。その時に好きになったんだらうね。きつとジユノアに向けるのは憧れの視線だよ」

「ユザは鈍感だからな。気付いてないが」

「ジユノちゃんは知ってるの？」

「薄々気付いてるんじゃない？」

人の恋愛に気付くんだらうか。

「ジユノちゃんがリニーを好きって可能性は？」

なんかそんな気がする。リニーを連れて来たのもそのためだった
りして。

ああジユノちゃん。敵わない恋をしてるんだね。

「さーな。ジュノアの恋愛なんて珍し過ぎて判断しにくい。娘と
思ってる可能性だつて捨てられない」
「いやそれはないでしょ」

自分とそんなに歳離れてないじゃん。顔だけだったらリニー童顔
だから20歳差ぐらいありそうだけど。胸はあるけどね。胸は。私
？聞かないで。

「おまえは今日はどうするんだ？」

「これからリニーを驚かしに行こうかと」

「てことはガキの守りはしなくていいんだな」

「ガキじゃないよー!」

「ああそっかい。じゃーな」

ヒラヒラと手を振りながらロイスは出て行く。きっとまた女の所
に行くんだろう。

「俺も今日は用事があるんだ。またね」

「うん」

頭を軽く撫でた後に出て行くレイル。レイルとロイスが用事つて
言っても女しか思い浮かばないんだけど。

でもレイル私に、こっ、告白したよね？ね??

「わかんない……」

まあいいや！ とりあえず、リニーの元へ行こう。で、リニーを
弄ろう！

「はあいリニー！」

「えっ!？」

ノックもそこに部屋へ押し入ると、ベッドを占領する。ん、音乃ちゃんったら大・胆

「え、えつと……」

「私分かる？」

「あの、その、違ってたらすいません……ネノ様、ですか……？」

「さっすがリニー！」

ベッドから飛び降りてリニーに抱き着く。リニーより背の低い私は、丁度リニーの胸に飛び込む形だ。うん、やっぱりいい胸してるよ君。

「ど、どうされたんですか？」

「あのね、ホントはこっちが本当の姿なの。トリップする前はこの姿で18歳。でもトリップしたら小さくなって……。ま、そういう感じ！」

「あのつ、でも、あっじゃあ私っ」

「お落ち着いてリニー」

まさかこんなにパニくるとは思わなかった。

「だって人形遊びとか……ごめんなさいっ」

「いいよいいよ。新鮮だったから。あの状況じゃ仕方ないし」

「あのでも、他にも無礼を！」

「いやいやいやもういいよりニー。無礼とか知らないから。それより……！」

「はい！」

いきなり大声を出した私にびっくりして返事を返すりニー。

「リニーってさ、ユザが好きなの？」

「え、えええ！？」

興味津々で聞くとみるみる顔が赤くなるりニー。いやんっ可愛い
く！

「ちょっとリニー座って！今日は乙女トークしよう……！」

うん、決定！ 根堀葉堀ざっくざっくだよ……！！

「んつとね、まずは好きになったのはいつ？」

「……はい。私、ジュノア様のお屋敷で働かせていただき始めたのは1年前なんです。慣れない私にジュノア様も他の方も優しくしてくださいなんですが、ある日ジュノア様が留守中にユザールド様が尋ねて来られて……」

「ふんふん」

「……一目惚れ、でした」

「ほーほー」

まあ、顔はいいからね。レイルとロイスには劣るけど。

「それからはずっとお慕いしています」

「ふむふむ」

「なので毎日姿を拝見出来る今の状況はすごくうれしいです。ジユノア様にもネノ様にも感謝しきれません」

「へっ？」

「ネノ様が来られなければ、王宮へ来ることは出来なかったですから」

「ああそつか。そんで？告白は！？」

「いえっそんな！ そんな……ことは出来ません。迷惑でしょうし」

「迷惑！？ 私のリニーに好かれてるっていうのにユザの分際でそんなわけないよ！ 自信持って！ リニー可愛いんだから！ 胸もあるし！！」

「む、胸ですか？」

「うん、すごく羨ましい。私なんかAだよ？ 今の日本の若者は段々豊かになってるってのに、ゆとり教育にも負けずにAだよ！ リニーは……Eぐらいかな」

「ニホン……ネノ様のお国ですか？」

「そう。色々問題はあるけど、いい所だよ。ってそれはいいとしてリニーは1年も片思いしてるってことだよな？ 前に彼氏がいたのはいつなの？」

「かつ彼氏だなんて……」

「恥ずかしそうに俯くりニー。」

「え？ 作ったことないの？」

「はい……」

「うっそ！ その可愛さで！？ 私なら放つとかないよ！ ユザになんか勿体ないけど、私一応女だしな。禁断の世界に足踏み入れるのも悪くないけどリニーが応えてくれなさそうだしな」

首を傾げるリニーは私の言った意味がわからないらしい。いいね、新鮮だよ。ピユア！

「あ〜リニーホント可愛い。食べちゃいたい」

心の声が漏れれば

「え！ 私美味しくありませんよ？」

真面目な答えが返ってきた。ていうかツッコむ所はそこなのか。まあそんなリニーも可愛い。そうだ、質問はまだあるんだ。

「ねえねえユザのどこがいいの？」

「え、あの……」

「顔？性格？テクニク？」

「テクニク……？」

「ああいいの、何でもない」

「ユザールド様と初めてお会いした時、驚いて手に持っていたお皿を落してしまっただんです」

その時のことを思い出しているのか、リニーの顔が嬉しそうに綻ぶ。

「それで割れたお皿の破片が私の足を掠って……それを見たユザールド様が慌てて止血して、魔法で治してくださって……」

「へえ」

「危ないからって、割れたお皿の片づけまでしてくださって……本当は私がしなくちゃいけないんですけど、『大人しくしてて。これ命令だから』って笑っておっしゃって……」

「ちよつとカツコイイね」

「もうユザールド様しか見えないです」

「やだありニーったらか〜わ〜い〜！！ ユザになんて勿体ない

「！」
「そそそそんなっ！ 本当は諦めなければいけないんですが、どうしても難しくて……」
「なんで？ 諦める必要なんてないじゃん？ 王子であるレイルもロイスも好き放題女遊びしてるんだから、その下のユザだって……あ、でもリニーで遊んだらクロス！」
「きつと私なんてユーザー様目の目には、映ってないです」
「そんなことないよ！ いい？リニー！！」

それから長い長い私的恋愛講座が始まった。

・
・
・

「ロイス、ゲームをしようか」
「あ？」

夜、オレ・レイル・ジュノア・ユザの四人だけがいる中、突然静かに切り出したレイル。今のレイルは、悪魔の微笑みを浮かべている。

「ネノを、どちらが先に落とせるか。それがゲームの内容」

ほらな、あの笑みは危ないんだ。

「……いいぜ」

だがその裏の思考も俺には分かる。

「ちょっと待ってください！　いくらなんでもネノ様はだめでしょう！」

抗議するユザ。邪魔をするなど言わんばかりに、レイルの冷たい瞳がユザを捕らえる。

「ユザ。おまえは人の心配より自分の恋の心配したら？　あんまりノンビリやってるとリニーも対象にするよ？」

「なっ」

赤面するユザ。どうもレイルのS心に火を付けたらしい。

「気付いてないけども？　ジュノアさえも気付いて、気利かせてリニーをこっちに連れて来たのに？　近くで獲物がチラついてるとついつい手を出したくなるんだ」

「それは！」

「リニー可愛いんだから気を付けないと。ねえロイス？」

「ああ。胸あるしな」

「俺はもう少し小さくてもいいかな」

「まあ、最終的に大事なのは感度だが」

「ふふ」

「ちよっ」

「だからさ、早く落しなよ。じゃないと奪うよ？」

それは誰に向けられた言葉か。
動揺しているユザと目を瞑ったままのジュノア。
さあ、これからが楽しみだ。

恋の前触れ！？（後編）（後書き）

いやぁお待たせしました。待ってないとか悲しいこと言わないでください

スランプなんでしょうかね？ 各小説とも書く気が中々起きないです。

全部微妙に進んで止まっています。んま、その内治るでしょう!!

読んでいただきありがとうございます！

苦勞人（ユザ）の悩み相談

体型が戻って数日、何故か現在ユザと二人きりで部屋にいるという謎の状況。

「なんでユザなんかと一緒にいなきゃいけないんだ」

「心の声漏れてますけど」

「あら失礼、つい」

溜め息を吐くユザ。この頃よく見かける姿だ。間違えた、前からか。

「で、何？ 一人でレディの部屋に尋ねてくるなんて」

「あ……ええ、そこは失礼だとは思ったんですが……」

言葉を濁らすユザ。なんだなんだ悩み相談か？

「その……変わりにないですか？」

「は？」

いきなりなんだコイツは。体型か？ なら見ての通りだよ。小さくもなっていないし、胸も大きくなっていないよ君。

「いえそうじゃなくて……」

またも心の声が漏れていたらしい。

「えーと、その、レイル様とロイス様と……」
「へ？」

レイルとロイス？ ああ！

「なあんだ、愚痴を聞いて欲しかったのか！」

散々あの双子には悩まされているだろうからね！

「え、いや……」

「いいよいよ、気にしないで！ ドンと聞いてあげよう！ じゃないとユザ禿げてきそうだもんね！」

そうしたらリニーも可哀想だ。

「……………もうそれでいいです」
「ん？」

諦めたような顔でポスッとソファにもたれるユザ。なんだかこんなユザは珍しい。

「それで？ ユザって小さい頃からレイルとロイスと一緒にだったんでしょ？」

「ジユノア様もね」

「ああそっか。でもジユノちゃんって優等生そうだから手かからなかったんじゃないの？」

「そうですね。物心ついた時から双子王子には苦勞しましたけど、

「ジュノア様はずっと俺の憧れですね」

「へー。なんで？」

興味津々に身を乗り出して問う。

「あの方は幼少期から鍛錬に励んで、女遊びもせずごく真面目です」

まあ、女遊びは難しいかもしれない。顔的な意味で。

「兵士からも一番信頼されています。実力もあり、相談も気軽に乗っけてくれますし、ずっと努力を怠りませんからね。当然のことでしょう」

「レイルとロイスは信頼されてないの？」

「いいえとんでもない。あの二方は不思議と人気が出るんですよ。影の努力もないと思うんですけど。何故か信頼されています。実力があるというのは認めますが」

「そうなの？」

「はい。藍騎士団団長はジュノア様。これは7年前から変わらないことですが、白騎士団団長も7年間変わりません」

そういえば、白騎士団団長だけ知らない。黒騎士団はユザだし。

「白騎士団団長は異例の二人。それがレイル様とロイス様です」

「えっ、そうなの！」

「はい。本来王子が団長を務めるという自体が特例です。ですが、どう見てもジュノア様の力は図抜けていて、ジュノア様も王子であることより、団員となることを望まれました。」

もちろん王と王妃は反対しましたよ。しかしジュノア様は譲りませんでした。そしてレイル様とロイス様まで団員になると言い出し

て……」

当時のこと思い出したのか苦笑いするユザ。

「その時はまだこんなに平和じゃなかったんです。大規模な戦争まではいきませんが、各国の睨み合いがしばらく続いていましたし、大きな戦争も起こり得た状況だったんです。

そんな中ジュノア様が団員になると言い出して、力は誰もが認めているので入団したら団長は決定的でした。

レイル様とロイス様は口には出さなかったですけど、本当は弟だけを戦いに行かせることが嫌だったんだと思いますよ。だから自分達も志願した……」

案外シリアスな話でびっくりだ。今この国はすごく平和に感じるけど、数年前は緊迫していたらしい。

ソファに仰け反っていたユザが体勢を戻し、私の顔を見て話を止める。険しい顔でもしていただろうか。

「すみません、話し過ぎましたね。そんなこんなで今の3つの騎士団団長はそういった構成になってます」

「ふーん。他の国では王子が団長を務めるのは珍しいの？」

「はい。この国ぐらいでしょうね。ラニッシュには王家に伝わる力があるんです」

あの最高魔法のことかな。

「近年は随分弱まっていたようですが、今の王子達の代で完全に復活したと言われています。他国もそれがわかったから仕掛けてこなくなっただけです。……まあ、昔の話はこれぐらいにしましょう」

「勝手に話したのユザだけどね」

「……」

「で、今のユザの悩みはないの？ あるよね？」

「なんで決定系なんですか？ いやありますけど」

「なに？ なになに？ 恋の悩み？」

「……違います」

あ、ちよつと目逸らした。怪しいな！。

「じゃあなにさー！」

すると言い難そうに下を向き、額に手を当てる。

「……髪が………毛が、薄くなったような……」

キターー！！

「うん、気のせいじゃないよきつと！」

やっぱりね！

最近のユザしか知らないから髪事情分からないけどね！ でもきつと王子達のおかげで減っているハズ！

「あの……もうちよつと気を遣っ……いやなんでもないです」

「大丈夫だよユザ！ 日本のリーマンはもっと苦労してるから！」

「ニホン……ネノ様の国ですか。リーマンというのは？」

「サラリーマンの略だよ！ 汗水たらして働く世のお父様方を指すんだよ！」

「はあ……」

「リーマンはね！ 妻にも上司にもプレッシャーかけられて肩身の

狭い思いをしながら懸命に生きてるんだよ！ 可愛い我が子にも『パパ臭い』とか言われながらもがんばってるんだよ！！』

「大変ですね……」

「そうだよ！！ マイファザーも言ってたよ！ 会社で『あれ？ハゲどこ行つた？』って言うと『どのハゲですか？』って返つて来るって！ それぐらい今の社会は薄毛が多いんだよ！！』

「へ、へえ……」

「他にもね！

『おい、ツルちゃんは？』

『あら、先程までいらしたんですが…… 光る場所を見つけてください』

『至る所で光り過ぎてわからない』

とかいう会話がされるらしいよ！！ 世はストレス社会だよ！

言葉も気をつけなくちゃね！

『あ、ちよつと薄く（プリントのインクが）なってきたかな……』

『（ビクッ）えっ俺の髪！？』

みたいなことになるから！！

「そ、そうですか」

「リーマンのことを考えたらまだユザはいいよ！！」

「そうですね……」

「うん！ あ、ユザってさー、一応人気なんですよ？ 女の子にも

モテるの？」

認めたくはないが、顔はいいからね。レイルとロイス程じゃなくても。

「え？ ああ……ええ、それなりに……」

「ふうん。じゃあユザも女遊びしてきたんじゃないの？」

「ええ！？ いやっあの……」

焦っているよ ユザの分際で。

「遊んだの？」

「いやその……十代の若気の至りといいますが……」

「遊んだんだよね？」

「ハイ……」

「くっそ、やっぱりユザなんかには惜しい……！」

「は？」

「うっん、こっちの話」

リニーの健気な恋は応援したいが、相手がユザなんて！ ふ・く・ざ・つう！

「今はしてないですよ？」

「当たり前」

「レイル様とロイス様はずっとですけど」

「あれは仕方ないね」

王様の前で公言してたもんね。民のためじゃなくて女のために生まれてきたって。

「俺の心配は色々ありますが、一つは隠し子です」

「はっ！？ ユザ隠し子いるの……！！？」

「俺じゃないですよ……！」

「びっくりした！ じゃあ誰さ」

「まだ居るとは聞いてないですが、レイル様とロイス様ですよ？」

「一人や二人……十人や二十人くらい居そうで……」

「ああ……」

「それくらいあの二人はすごいんです。ネノ様がいるこの頃はマシですが」

「色んな女の子の所行くんでしょ？ バレないの？」

「変装はしていきますからね。目と髪の色を変えたり……。大抵一
夜なんでそこまでバレないかと」

「ふーん」

「だからあの……ジュノア様がいいと思います……！」

「え？ 何が？」

「ああいえ何もっ」

部屋に入ってきた時からだが、

なんだか煮え切らないユザだった。あ、いつもか？

苦勞人（ユザ）の悩み相談（後書き）

ハゲの部分の会話が実話を元に書いてるなんて、そんなことはありません。

決してありません（棒読

ユザにずっと言わせたかったです。毛のことを。

ポケとはツッコミがいてこそ力を発揮するものだ

いつもレイルとロイスに付いているか、訓練場にいるユザなのに、なんで今朝は超乙女の私の部屋に来れたのか。

その疑問を持ったのはユザが帰ってから2時間は経った後だったが、理由はジユノちゃんの部屋に行ってわかった。

ノックもせず慣れたようにガチャと扉を開くと、そこにはジユノちゃんとユザ。

「あれ？ ジユノちゃん？……とユザ？」

いないはずの二人の姿がそこにあって、首を傾けながら扉を閉める。

「……今日は休みだ」

私の言いたいことが分かったらしいジユノちゃんが答えてくれた。休みってのは訓練のことだね？

トコトコとソファまで歩いていく。

「ん？ 休みならレイルとロイスも放っておいていいの？」

「いいえ……」

バツの悪そうなユザ。

「そういえば昨日も見えてないような……」

レイルとロイス……見たっけ？

ボフツとソファに体を沈めると、前に座っているユザが窓の方を向く。

「はい……逃げられてます」

「ダメじゃん。女の部屋来てる場合じゃないじゃん」

あ、二人ともいなかったから来たのか。なんて自己完結したのだが、私の言葉にユザがピシリと凍る。

更に隣に座っているジユノちゃんの目が鋭くユザを射抜いている。どうしたんだ。

「ち、違いますよジユノア様」

窓側へ向いていたユザが、ギギギッと首を動かす。

「……なにがだ」

低い。なんでそんなに声低いんですかジユノちゃん？

空気がなんだがヒンヤリとしていて居心地が若干悪いような気がするのは気のせいか。

そんな微妙な雰囲気の中、とっても空気を讀んだ私のお腹が存在を主張する。

ぐるると、場に似合わない音が鳴るとジユノちゃんもユザもこちらを見た。

「いやんっ、そんなに見ないでっ？」

「……」

「……」

くっ！すべった。これは完全にコマンドを間違えた。 + x ボ

タンを押すハズが ボタンを押すぐらいに間違えた。

ロイス辺りならツツコミを入れてくれたかもしれないが、引いている顔のユザと無表情のジユノちゃんではキツかった。

「……用意を」

「はい」

微妙な雰囲気を変える方向の微妙な雰囲気に持つて行った腹だった。

仕方がない、人間は生きている限りお腹が減るんだ！

両こぶしに力をいれながら心の中で言い切ると翼もバツサリと開いた。

少しお昼には早かったが、お腹の催促によりジユノちゃんの部屋に料理が並べられた。

「やっぱり肉だよな！ あ、これはイヤ。はいジユノちゃんあげる」

「……」

「ネノ様、好き嫌いはだめですよ」

「あ、ユザ。ワカメは髪にいいって言っよ？ いる？」
「……もうお好きにどうぞ」

勝った！ ユザとの（謎の）戦いに制した私は、好きな物だけ食べ後はジユノちゃんに任してお昼を終えた。

「ジユノちゃん、暇」
「そうか」

いやいやいやいや！

食べ終わって再びソファで寛ぐ私たちだったが、私・ジユノちゃん・ユザのメンツでは時間にも限界というものがあつた。
リニーもどっかに行ってるし。

ていうか。

「リニーは？」
「休みを取らせてる。ネノも子どもじゃないとわかつたしな」
「あ……なるほど」

ある程度放っておいても大丈夫だろうってことね。オツケー！
全然大丈夫だよ！ 時々変なことしてるかもしれないけどね！！

「少し不安もあるが……」

横目で見えてくるジユノちゃん。
流石わかってるね！

しかし暇だ。

「ユザ」

「はい」

「なんか面白いことやって」

「そんな無茶な」

チツ、あ。

「ねえユザ」

「はい？」

「恋人いるの？」

「いえ」

「好きな子は？」

「はっ!？」

なんてわかりやすい反応をしてくれるんだ。

明らかに反応を示したユザと、意外にもピクリと眉を動かしたジ
ユノちゃん。

「誰？」

「……いないです」

「いやいるでしょ。ダレ?……王宮内にいる?」

「……まあ」

「ふーん。……侍女長とか？」

「……それ本気で言ってます?」

「ごめんごめん。まず熟女好きの可能性を探ってみた。違って安心
したよユザ君」

「そうですね……」

そうだなー、次は……。

「あーあの子。そうそうフィンナ！」

「誰ですか」

「厨房の女の子」

「知りませんよ。むしろなんでネノ様は知ってるんですか」

「そりやつまみ食いしに行ったからだよ！！」

そこで仲良くなったんだ！ 結構かわいい子だった。

「ホントに自由ですね……」

「まあね！ リニーにもちゃんと分けたからね！ 一人で食べてないよー！」

リニーはすごく困ってたけどね！

「ん？ なんで黙るのさ？」

「え？ あ、いえ。……リニーも、喜んでましたか？」

「うん多分ね！」

「多分なんですか……」

「うん。じゃ次は……」

やる事がなくてユザの好きな子当てを始めたけど、その後も全然当たらない。

ジュノちゃんの手前、リニーとは聞きにくいし。え、もしかするのかな？

「……」

「どうしました?」

「うーん。ユザってさあ、もしかして……」

そこでチラリとジユノちゃんを見る。

「え! 違いますよ!」

「は?」

まだ何も言っていないんだけど。ってああそういう事。

「別にそこ疑ってないよ! 生B Lなんて見たくもないわ」

「びーえる?」

「あー気にしないで。ビールの進化系」

全然違うけど。ていうか進化系ってなんだ。

「ねえユザ。もしかしてリ 「よお」

あ、ロイスとレイル」

リニー好きなの? と続けようとした言葉は超美形双子王子の登場によって遮られた。

「まったくどこに行ってたんですか!」

「落ち着いてよユザ」

いつもの笑みを浮かべながらレイルが歩いてくる。

「やあジユノア。変わりないかい?」

「ああ」

「ふあゝ眠い」

「夜遊びのし過ぎです！」

「あーそうだな。わかったから静かにしてくれ」

ソファに深くもたれたロイスは適当にユザをあしらっていた。

「ふふ、俺も眠いね。3人は何してたの？」

「ユザの好きな子当て」

「へえ」

「はっ。教えてやろうか？」

鼻で笑ったロイスが意地悪そうな笑みを浮かべてこちらを見る。
うん、カツコイイ……。

「ちょ！ やめてくださいよ！」

「くはっ。そう焦るなよ。で、そんなしょーもない事をしてたって事は暇なのか」

「そーなの！ すごい暇！ ユザで遊ぶぐらい暇だった！」

「じゃあ町に降りてみたら？」

「え！ いいの?!」

「いいんじゃない？ 丁度ジュノアも休みだし」

「……レイル」

低く、唸るような声でジュノちゃんが呼ぶ。

「いいだろジュノア。行ってやれよ」

「……」

「二人は行かないの？」

「「眠い」」

「あ、そう。ねえジュノちゃん、ダメ？」

眉を寄せるジュノちゃん。なんで？

あ、人気過ぎて？ だって国の英雄だもんね。きつと人がいつぱい寄って来るんだろう。ジュノちゃんの性格からしたら嫌かもしれない。

「……仕方ない。ユザ行こう！」

「ええ！？」

「だってジュノちゃん行きたくないんでしょ？ 無理に連れてくのも気が引けるし！」

「……行く」

「え？」

「行く。」

ただし、どうなっても知らんぞ」

ジュノちゃんの鋭い目はレイルとロイスに向けられていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8431p/>

トリップしたら幼児化&翼が生えた！

2011年12月11日18時45分発行